

42263

教科書文庫

4
810
42-1930
20000
85187

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

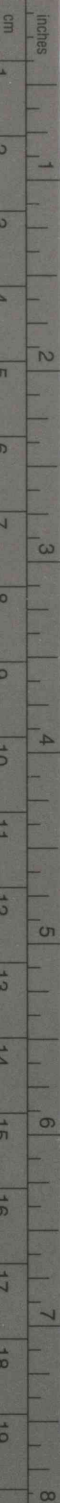


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
昭5

改新女子國文 卷六



資料室

文部省檢定濟

昭和五年四月五日 高等女子學校國語科用

4b
810
AB5

文學博士 芳賀矢一 編
文學士 橋本進吉 訂補

改新女子國文

東京

合資會社 富山房發兌



和の宮の御東行



改新女子國文卷六目次

一	秋が来た	野口米次郎	二
二	三つの眺		四
三	朝鮮の美術 <small>その一</small>	柳宗悦	二
四	朝鮮の美術 <small>その二</small>	柳宗悦	三
五	美術の鑑賞 <small>(自修文)</small>	川路柳虹	六
六	博雅の朝臣	<small>(今昔物語)</small>	五
七	我が國の音楽	田邊尚雄	三
八	舟ふな	<small>(狂言記)</small>	四
九	薄	三木露風	四
九	百花譜	大町桂月	五

福澤先生の生家(自修文)……………澤田謙……………五

一〇 町人の説……………太田正孝……………壹

一一 秋の歌、冬の歌……………吉田絃二郎……………七

一二 いちひの樹…………………………八

一三 みやび…………………………八

一四 女流の俳人……………萩原井泉水……………八

一五 秋の句、冬の句…………………………九

一六 俳句評釋(自修文)……………沼波瓊音……………九

一七 松の下露……………(太平記)……………一〇

一七 櫻古……………島崎藤村……………一三

一八 御即位禮拜觀……………久米正雄……………一六

一九 禁庭の野分(昭憲皇太后御作)…………………………一六

二〇 婦人と文學的教養……………本間久雄……………一八

二一 狂歌…………………………一三

二二 笑(自修文)……………戸川秋骨……………一五

二二 日 本……………德富健次郎……………一四

二三 野村望東尼その一……………額田六福……………一四

二四 野村望東尼その二……………額田六福……………一五

二五 尊い獻身の生涯……………高須梅溪……………一七

(一)
詩人。教授。愛。遊。活。時。等。究。し
多。縣。知。躍。の。日。の。は。日。の。書。て
慶。明。年。に。英。黙。本。文。多。る
應。治。生。歐。詩。の。詩。集。の。發
大。八。米。境。に。近。及。研。表

改新女子國文 卷六

一 秋が来た

野口米次郎^(一)

わづか二三日のことで、
空氣が金ばかりし始めました。
白羽二重をその中にさらしたなら、
きつと黄色に染まりませう。
今わたしは廊下の障子をあげ、
十月なかばの空氣を吸つて、
その甘いのに驚いてゐると、
どこからか無数の赤い蜻蛉が飛んで来て、

わたしの眼の前で入交り、
黄金の空気を浪うたせます。

澤山ある花の中でわたしは木犀を一番
すきます。

葉の下から小さい内氣な花が咲いて、
人の知らないまに散つてしまふ。

暑い夏から咲きとほして来た百日紅も、
今は二つ三つの花が残つてゐるばかり
でございます。

しばらく雨が降らないので、

伽羅の黒びかりする葉もよごれ、

廊下に懸けたカーテンの染が特に目立

[Curtain.]

つて来ました。

地面はもはや薄ら冷たいので、
けふは一足の蟻さへ出てまゐりません。
あゝ秋が来ました。わたしのすきな秋が
来ました。

わたしが座敷から澄みきつた紫色の空
を眺めてゐると、
いつのまにやらわたしの目は見えなく
なつて、

わたしの耳へ過行く時の足音のみが響
いてくるやうに覺えます……
どうんどうんと御承知の時の足ぶみが。

煌々

群陰皆影を伏す
有象無象

二二三の眺

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つてゐる熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふ

(一) 賀茂真淵の門人
荷田蒼生子の歌

であらうが、限なく世界を照らす月光の、人の胸懷に浸みわたることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。
「うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶは千々の思なりけり。」
ある。



(筆風草野長) 月霽秋高

東西古今、
悲喜哀歡の
情熱は、幾萬
回となく、幾
億回となく、
この光に向

嗟歎
感吟

古往今來

かつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各国の文學に充ち満ちてゐる。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。と、この冷たい光が、古往今來どれ

ほどの暖みを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永
久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色
を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も
皆同じ色に埋められる。花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて
雪降るみ吉野の山。といふやうに、眼に入るもの悉くその下に包
まれてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層の美觀は、一切の
人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱か
しめる。天から落ちてくるこの純白な色に比べては、地上の花も
甚しく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ
一條の川水を残して、山といはず、野といはず、瞬くうちに瓊玉を
敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の
料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花

乾坤を一つにす

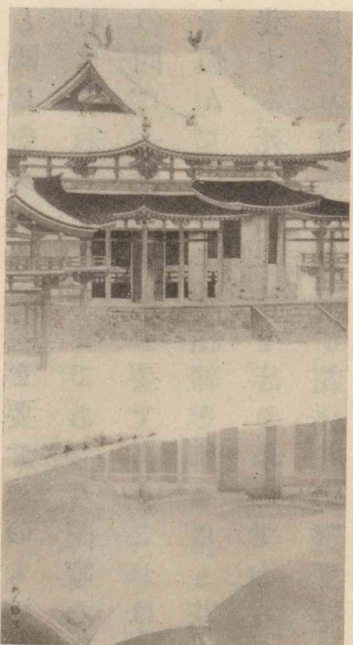
(一)新續古今集、僧
仙覺の歌

(二)唐の詩人白樂天
の句

廣寒宮

瓊玉を敷く

對照の妙
造化の巧



(筆天彩村田) 雪の閣樓

紅葉いろいろな眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後
の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青
葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞
に對照の妙、變化の奇
造化の巧をつくした
ものではないか。一年
中蓮の花の咲いてゐ
る極樂淨土は、決して
我等の世界ほど樂し

いものではなからう。
雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、
春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花
のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、

棺郭

(一) 年ふれば齢は
老いぬればあ
れど、花をかし見
ればものおもひ
もなし(古今
集、藤原良房)

咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ花をし見ればものおもひもなし。といふ古歌を

(一) 新古今集、康資
王の母の歌

(二) 古今集、清原深
養父の歌

(三) 謡曲「葛城」の
句

以てすべてを總括し得べしと信ずる。月雪花三つの眺には各、その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことは出来ぬ。

(一) やま櫻花の下風吹きにけり

(二) 木のもとごとの雪のむらぎえ

(三) これは花を雪に譬へたのである。

(一) ふゆながら空より花の散りくるは

(二) 雲のあなたは春にやあるなん

(三) これは雪を花に譬へたのである。

(一) 笠は重し吳山の雪鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

(二) これは雪を月と花とに譬へたのである。

(三) 花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を賞でぬ人

寸紅

不夜城の観

(一) 伊藤仁齋の歌。
(二) 唐の劉廷芝が
翁に代りて「
詩句

もない。
思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉ざれてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を楽しませしめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歴史が加はつて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。入

(一) 宗教哲學者。明治二十二年東京市に生れた。宗朝と其の眞理、朝鮮と其の眞理、著がある。

動く心

生の感は花を見て益々繁く、雪を見て愈多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に備へたるよ。如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

三 朝鮮の美術

その一

柳

宗悦

試みに朝鮮の主都を訪ねて、南山に登り、その市街を展望して見よう。眼にうつるのは、その家屋の屋根に現れる限りない曲線の波ではないか。若しこの原則を破つて、その中に直線の屋根が見えるなら、それは日本かまたは西洋の建築だと斷言していい。東京の小高い丘に上つて市街を見おろす時と、如何に異つた感を受けるであらう。そこには殆ど直線があるのみではないか。曲線の波は、動く心の徴である。都市は大地に横たはるといふよりも、波のまにまに浮かぶのである。そこに眺め入る時、彼岸の渚を

打つ音を微かに聞く思がある。あの法隆寺所藏の「百濟觀音」を想ひ浮かべよ。または夢殿に秘められた觀世音の立像を心に浮かべよ。やうつむく頭から、肩に沿ひ靜かに體から足へと流れる、背高きその姿を目のあたりを眺めよ。特にその側面は美しいではないか。それは一つの形であるといふよりも、寧ろ流れる線である。垂れかゝる衣さへも共に流れてゐる。作者は何故に一般の形式を踏まずして、彼女に細き胴體と高き丈と、想ひがちな風情と、流れるやうな姿の線とを寫し出したのであるか。私は朝鮮民族の血の中に、深く交へられた動かすことの出來ぬ特殊な性情を思はないわけにはゆかぬ。新羅の舊都慶州から數里を隔てた吐含山上に、今有名な窟院が残つてゐる。景德王朝にゐた金大城の作だといふが、釋迦を中央に大小四十個近い佛像が刻んである。見る者は誰も驚くであ

(一)慶尙北道南部の都邑

観する

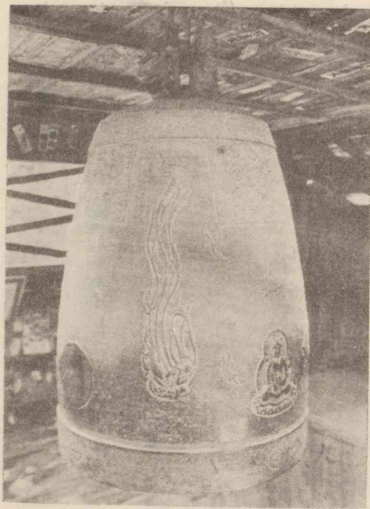


慶州石窟の釋迦

らう。そこには固い石も柔く浮かんでゐる。特に窟内にある十一面觀音や、四人の女菩薩や、十人の弟子や、それ等のものが、如何に美しく刻まれてゐるであらう。美を飾つてゐるのは、同じやうに流れる幾條の線である。水に浮かぶ蓮花の上に、思ひに沈む姿が心の内に秘めて佇んでゐる。彼等こそ民族の親しい姉妹であり兄弟ではないか。人の稀な峰の上の暗い窟院が、人の巡禮したい場所であつた。中央に釋迦は默坐する、而してすべてを知り、すべてを觀じ、慈念に溢れつゝ、すべてのものに靜かな憩ひの場所を與へてゐる。慶州といへば、私は、あの奉徳寺の梵鐘を忘れることが出來な

い。それは恐らく美に於て東洋無比の鐘であらう。江原道の五臺山にある上院寺の梵鐘も美しいが、それ等のものに彫刻せられた飛天の圖を見よ。天女は衣と雲との波を分けて流れる如く浮かんでゐるではないか。あのやうな美しい人を魅する姿は、世に多くはないであらう。それは形の圖であるよりも線の圖である。時代は遡るが、あの大同江附近にある高勾麗時代の壁畫に於ても同じである。それは恐らく支那の様式を模したものであらうが、然し朝鮮の味はひがにじみ出てゐる。壁に描かれた天女の圖を見よ。または四神、即ち玄武と朱雀と青龍と白虎とを見よ。これ等死者を守護する力の神さへも、幅とか嵩とか重みとかの美によつて表されてゐるのではない。それは線の中にある模様だとさへいひ得るであらう。細くして長い曲線が、すべてを支配してゐる。それは線によつて示された圖様の極端な事例であらう。

我々は、建築とか彫刻とか繪畫とかに於てのみ、まがひもないこの特質を見得るのではない。あの朝鮮最古の天文臺である慶州の瞻星臺にすら、よき曲線が見られるではないか。一般工藝品に至るに及んで、我々は隨所に新朝鮮の線を見ることが出来る。特に著しいのは、その陶磁器である。例へば一つの酒瓶をとら鐘う。時として首は非常に長く、時として頸は非常に細い。口は屢根元から上まで延ばされ、手は細くして且つ長い。あの有名な李王家博物館所藏の唐子葡萄模様辰砂入の象嵌青磁瓶は、その傑出した代表作であらう。すべては長くして細いが故に、形は不安である。然し線を求める要求は残りなく満されてゐる。如何にこ



新羅朝作梵鐘
特に著しいのは、その陶磁器である。例へば一つの酒瓶をとらう。時として首は非常に長く、時として頸は非常に細い。口は屢

れ等の細く長い部分が、實用には破壊され易く、不適當であらう。然し人々は、現し世に望をもたぬ、實際的な要求を放棄して、迄、曲線への要求を充たさうとした心理を忘れてはならぬ。

床に置かれ平らかな形をとる鉢に於ても、かゝる心理がひそかに働いてゐる。地につく高臺は小さく、鉢はその縁に於ていつも靜かな曲線を表してゐる。殆ど胴體のみをもつ幅廣い壺の如きものに於ても、人々は無意識にその要求を交へた。朝鮮の壺の代表的な形とは、如何なるものであるか。支那に於けるやうに、壺は圓みによつて安定されてゐるのではない。依然として丈は高く、腰から足にかけて姿は非常に細い。さなきだに小さな高臺の輪を、斜に切落すことに於て、安定の度は更に失はれてゐる。それは、地上に置かれるが爲の形ではない。然しそれが朝鮮の姿である。どうしてかく迄に線への心理が働いてゐるのであらうか。私

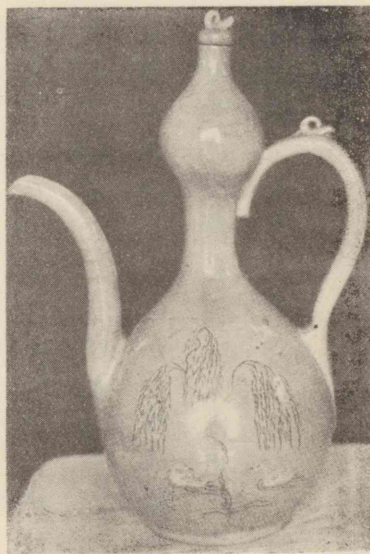
は民族によつて經驗せられた苦みと悲みとが、思はずもここに心を誘ふのであると思ふのである。

寂しさは、秘められた寂しさであらう。頼るべき打ち明けるべき友を持たない心であらう。内氣な黙した隠れた美が、かくして生まれたのではないか。あの模様を内に匿す象嵌の手法が、朝鮮に於て榮えたことは如何に必然なことであらう。あの淡い靜かな青磁の中に、ほのかに白や黒のつゝましい色で、模様を内に沈ませた心の働を、何と人は思ふであらう。この手法は陶磁器に於てのみではない。彼等は、好んで鐵製の器に銀を刻みこんで、模様を内に匿した。

恐らく朝鮮の陶磁器に於て最も注意すべきことは、その殆ど一切が、酸化焰でなく還元焰によつて焼かれたことであらう。還元焰とは煙多き燻る炎である。彼等は好んでこの道を選んだ。燃

對比

えきつた明るい焔は、彼等の知らない焔である。彼等は、煙によつて面を内に沈ましめ、靜かな涙多い心を語らうとしたのである。否かくすることが、彼等のなし得たたゞ一つの相應しい手法で



靑硬の酒瓶 (高麗窠)

あつたであらう。美はそこに顯れる如くにして匿れてゐる。器は、淡い水色の釉藥の中に光を消しながら、靜かに佇んでゐる。何たるいぢらしさが、そこにあるであらう。好んで酸化焔に器を焼いた日本の陶工とは、如何に明らかな心の對比であらう。一つはほの暗い、一つは明るさに過ぎた面を示してゐる。これが味はれた異なる生活状態であつた。我々は、光の豊かな、殆どすべてが窓である家を建てる。だが朝鮮の人々は光の少

洞察 密意

ない壁のあつた窓の小さな家を選んだ。

たゞに陶磁器に於てのみ線の要素が勝つてゐるのではない。たびたび我々の眼に觸れる高麗朝の匙の如きは全く線の流だともいへよう。それが實に日常の器具であつた。これは例外ではない。どこにも、我々は、朝鮮の線を見ることが出来る。机の足にも、抽斗の環にも、扇の柄にも、小刀の鞘にも、彼等の心が潜んでゐる。それ等のことを心なく見過してはならぬ。あの踏まれる足袋にも、泥にまみれてゐる靴の一端にも、同じ曲線の血が通つてゐる。よく我々に洞察の力さへあるならば、日常の器具を通じて、民族の希願や、引いてはその國の歴史や自然を迄、理解することが出来るであらう。線の密意を解き得ない間、朝鮮の心に近づくことは出来ぬ。

四 朝鮮の美術 その二

私は、徐々に、朝鮮の藝術が何を語るかを明らかにし得たと思ふ。然し私は、尙もその特質を明らかにする爲に、更に二三の著しい事實を指摘して、私の言はうとする趣味を述べたく思ふ。

例へば模様に現れた心を語つてみよう。朝鮮固有の模様の中で、特に有名なのは、蒲柳水禽の圖と、所謂「雲鶴」とであらう。特にこれ等の模様は、高麗焼とは離れ難い關係がある。何故朝鮮の人は、柳を好み水禽を描き、雲を愛し鶴を慕はしく思つたのであらう。誰にも自からその意味が解るであらう。この世に樹の数は多くあつても、柳の枝ほど長くして細い美しい線を持つものはないではないか。たわやかな流れるやうなその線は、無常なこの世に、休らひ得ない心の暗示ではないか。模様は柳の模様に於て、全き

朝鮮の模様を示してゐる。その淋しげな柳の陰に遊ぶ水禽は何を語るのであらう。水は流れる水ではないか。それも線の流であらう。禽は、その水の流のまにまに浮かぶ禽ではないか。一時も不動な形を得ない水の流、一時も足を大地に踏むことのない浮かぶ水禽、これこそは、その半島の民族が、心に嘗めた親しい經驗の象徴ではないか。どこにそんなに淋しい美しい模様があらう、人は屢、汀に沿うて、まばらに生えてゐる浮草を、その傍に見るであらう。

恐らく雲鶴の模様に於ても、同じ心の求めが讀まれるであらう。限りない大空の中に、一つ二つの切れ切れに浮かぶ淋しげな雲、またはその中をどこをあてどもなく飛びゆく二三の鶴、あの淡い沈みがちな水色のおもてにこの模様を見る時、夕ぐれ、高い空に一聲二聲物哀れげな響を残して、何處にか消えてゆく鳥の

附會

行方を追ふ思がする。鳥の類は多くあつても、丈高く足長く、細い羽に空を飛ぶのは鶴ではないか。それは心に招かれた模様である。かく思ふのは附會であらうか。私はそこに匿された必然の意味があると思はないわけにはゆかぬ。

私はここに、線が朝鮮の殆どすべてを支配してゐる特質であるのを指摘した。若しも、形と色との要素がそこに乏しいことを更に指摘し得たら、私の見解はなほも正しい基礎を得てくるわけである。私は、このことに關しても興味深い幾多の事例をとることが出来る。然し、強い形の缺乏に就いては、既に語る必要を見ないかと思ふ。なぜならば、細い曲線とか丈高い姿とかは、自ら安定な形の美とは離れるからである。美が線に支配せられてゐるとは、それが強い形を缺くといふことを裏書する。私は轉じて、朝鮮に於ける色彩の缺乏に就て筆を新たにせねばならぬ。これが

立證せられたら、何故その民族が表現の道として線を選んだかの理由を、一層はつきり知ることが出来るであらう。

支那やまた特に日本で、あのやうに色彩の多様な衣服が發達してゐるのに、なぜその隣國の朝鮮に殆どこのことを見ないのであるか。用ひられる衣服の色は、何もの色をも持たない白色ではないか。さもなければ、最も色を少なく持つ淡い水色ではないか。年老いた者も若い者も、男も女も子供も、一樣な白い着物を着るとは如何なるわけであらう。この世に國は多く民族は多いが、このやうな奇異な現象は何處にも見ることは出来ぬ。史家でない私は、かゝる衣服の制度が、いつの時代に起つたかを斷定する根據を持たない。然し白い衣は、いつも喪服であつた。淋しい慎み深い心の象徴であつた。民は白衣を纏ふことによつて、永遠に喪に服してゐる。その民族が嘗めた苦痛の多い頼り少ない歴史的

経験は、かゝる衣服を纏ふことを、寧ろ相應しくしてしまつたではないか。色に乏しいのは、生活に樂しさを缺くまがひもない證據ではないか。試みに朝鮮の人々が、白衣の通則を破つて、色に飾られる衣を選ぶ稀な場合を考へてみよう。たゞ樂しさが許されてゐる時のみ、人々は彩られた着物を着るのである。その民族に許されたかゝる場合が三つある。たゞこの三つの場合のみ、衣は多様な色に飾られてゐる。三つの異例とは何々であるか。第一は、王公とか貴族とか、力あり富ある者によつて、屢衣に美しい色を用ひられる。理由は自明である。かゝる人々は、安定な幸福な生活を樂しみ得るからである。第二には、祝とか祭とか、人々が喜び合ふ時に、朝鮮の人ははでやかな着物を着る。婚禮の衣裳は、何處に於ても美しい。あの正月とか端午の節句とかに於てすべての若い者は喪服を脱捨ててゐる。一年中に於ての許された賑はしい

幸な樂しい時だからである。第三は、あの無邪氣な、世の苦痛を知らないすべての子供である。子供ばかりは、屢、白い衣の中に在つて、色様々な姿をする。實に、朝鮮に於て、色彩あるものを見る場合は、大概この子供らしい無邪氣な色を示してゐる。樂しさは色に飾られ淋しさは色を離れるのである。たゞこの樂しさを許された三つの場合にのみ、朝鮮の人々は色を身に纏つてゐる。それは如何に必然な理由であらうか。かゝる樂しさを持たぬ時、すべての者は再び喪服に歸る。否、常にはかゝる樂しさを持たぬが故に、白衣が選び得る常服である。この色彩を離れた世界が、人々の住まねばならぬ現世であつた。形でもなく色でもなく、どこに彼等の心を托すべき表現の道があるであらう。殘る線が、彼等に迎へられ愛せられた必然な理由に、人々は厚い理解を持たねばならぬ。朝鮮の人々が色彩を樂しむ餘裕を缺いた例を、磁器に於ても

(一) 鍋島焼、伊萬里焼のこと

見ることが出来る。磁器に於て、色彩が最も發達したのは、明の時代であつた。所謂「上繪」に於て、色は絢爛な美を競つたのである。支那から日本に傳へられるに及んで、色彩は一層賑はしくされた。九谷にしる鍋島にしる、赤繪は、その生命であつた。共に支那に於て、日本に於て、かく迄に發達した上繪の手法が、あの磁器の時代であつた。李朝に於て、少しも採用せられなかつたのはなぜであるか。全く人々が色を樂しむ心の餘裕を持たなかつたからであらう。李朝には、眞に永遠な陶磁器がある。だが用ひられた顔料は、藍と鐵砂と、僅かばかりの辰砂とである。それもすべては慎ましい色調であつて、華かな冴えたものを見る場合は少ない。私は屢々それらのものに見とれて、作者の心に働いてゐる淋しい感情を思はないわけにはゆかぬ。

朝鮮の生活が、一般に樂しさを缺いてゐたといふ實例を、もう一つ添へておかう。それは、子供が遊ぶ玩具の極めて少ない事實である。玩具とか人形とか、その種類の豊富なことに於て、支那も日本も共に世界に知られてゐる。それなのに、この二つの國の間にある朝鮮に於て、それを見る場合が極めて少ないのは何故であるか。このこともまた今迄私が言はうとした事柄を裏書してゐるではないか。

同じことが陶磁器に於てもいへる。世界の何處に於ても、燒物の最も多い用途の一つは花瓶である。然るにあの陶器の國といはれる朝鮮に、花瓶が殆どないのはなぜであるか。人はあの色に、美しい花を樂しむ心を持ち得なかつたからであらう。

音樂に至るなら、なほ一層この特質を認め得るであらう。私は、室に於て、また路傍に於て、屢々朝鮮の音樂を聞くことが出來た。然しそれを聞く毎に、淋しい頼りない物哀れな感情に胸を壓せら

哀傷

れてくる。連々として沈むが如く、失せるが如き長き音律、音にも同じ朝鮮の線が流れてゐると私はいつも思ふ。それはどこ迄も、哀傷の音楽である。あの張裂けるやうな支那の音楽の強さと、如何に著しい對比であらう。

—信と美—

自修文

美術の鑑賞

川路 柳 虹

(一) 畫家、詩人、名は誠、明治二十一年東京市に生まされた。詩集、路傍の花、曙の聲、歩む人、温室の花、歩評を多く發表してゐる。
美術 繪彫刻、建築など美を表すことを目的とするわざ。
偶然 おもひがけなく不意に。

すべて美術といふものは、何に限らず、味はふことによつて價值が出てくるものです。どんな作品にせよ、美術家が精神を籠めて作つたものである以上、これを觀る人は、その苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然に出来るものでない以上、その作品はどういふ風にして出来たかを考へ、そして、それを觀て自分はどうか感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味はふことです。この「味はふ」ことを鑑賞と申しま

個性 そのもの、特有な性質。

す。畢竟、繪でも、彫刻でも、これを作つた人は、自然について感じたことをそれに表したのですから、その表したものは、即ち作者自身の考や、もの見方の態度を示したものであるといへます。それ故、一つの美術品を味はふことは、單に作品を味はふことではなく、その作品を作つた作家の精神を味はふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人のかいたものと、乙の人のかいたものとは、色も、形も、すべて相違してゐます。それはなぜかといふに、作者がそれぞれ自分自身の個性によつて、同じ色でも、甲はこれを強く表し、乙は非常に弱い調子で表すといふ風に、その作者の心持や感じが異なるからです。その異なるところに個性の差が生ずるのであり、美術上の作品は、各作者の異なる個性を表すから面白いのです。美術家は一般の人がなん等の注意も拂はない所に非常な注意を拂ひ、人の氣付か

漠然
はつとして明ら
かでないさま。



ない所に美を発見します。一般の人でも夕日の美しさは漠然ながら知つてゐませう。然し、その夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。美術家は自然のさういふ微細な點にまでも常に注意してゐますから、そこから人の常に看過してゐるものに對して、非常に美しいものを發見してくるのです。ですから、繪や彫刻を観るといふことは、一面には、さういふ自然に對して私たちの看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふことになります。美術品を味はふこと

は、その味はふことによつて、常にはなんでもなく見えてゐた自然が、かうも美しいものであるかといふことを、ほんたうに知るところにあります。

私はよく「私には美術はよくわからない。」とか、「ここが良いのか悪いのか見當がつかない。」とかいふことを聞きます。この「わかる」といふことは、無論その作品を理解することを意味しますが、然し美術品を理解するには、科學などを理解するやうに、たゞ理窟にだけ依つてはいけません。勿論理智も必要ではありませんが、美術品は理窟によつて解する以外に、「感ずる」といふことが必要です。だから、美術の鑑賞には、「どういふ風に理解したか。」といふことよりも、「どういふ風に感じたか。」といふことが肝腎です。なんとすれば、美術品はやはり人の感情に訴へるもので、何よりも人を感動させるものですから、これを観てなん

等の感じも起らないといふなら、それはその作品が美術品としての資格を備へてゐないか、或はこれを観る人が感情に乏しいかに因るのです。ここに感情といふのは、悲しいとか、嬉しいとかいふことを意味する感情ではなく、むづかしくいへば、感性といふべきもの、即ち感ずる心のあることをいふのです。感性がなければほんたうに美術品の鑑賞は出来ません。結局美術を味はふといふことは、自分の氣持を以てその作品を観るといふことです。

それでは、如何にすればさういふ風に、自分の感情で美術品を理解することが出来るかといふに、それには、まづ虚心平氣で作品を観ること、なん度もなん度もこれを熟視すること、その技巧を知ること、これ等の條件が必要です。作品を味はふ爲には、徒に他人の噂や評判などに動かされないで、自分でどれ

虚心平氣
心があつさりし
てゐて、氣もち
のおだやかなこ
と。

邪念
れじけた心。

を好むかといふことを考へるべきです。その爲には、まづ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、それをなん度もなん度も熟視してゐることです。そのうちに、いろいろなことがわかつて來ます。さて、それから一般の技巧即ち作品の技術を見るのです。巧であるとか、拙いとかいふことは、要するに比較です。澤山な作品を観た上でなければわかりません。澤山な作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次には、その作品がどういふ風にして出來てゐるかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の知識を養はなければなりません。楽譜に關する根本の知識に缺けてゐては、せつかく音楽を聴いてもわからぬやうに、よく美術品を理解するには、やはり一通り技術に關する知識を有する必要がある。

油繪 西洋畫の主なるもの。油繪具でかいた畫。
水彩畫 油繪の對。水に用ひてかいた畫。

調子 英語 Tone の譯。

筆觸 英語 Touch の譯。

様式 英語 Style の譯。畫の流派。圖が

管絃の道

えならす

殿上人

雑色

四位 五位 六位 七位 八位 九位 十位 十一位 十二位 十三位 十四位 十五位 十六位 十七位 十八位 十九位 二十位 二十一位 二十二位 二十三位 二十四位 二十五位 二十六位 二十七位 二十八位 二十九位 三十位 三十一位 三十二位 三十三位 三十四位 三十五位 三十六位 三十七位 三十八位 三十九位 四十位 四十一位 四十二位 四十三位 四十四位 四十五位 四十六位 四十七位 四十八位 四十九位 五十位 五十一位 五十二位 五十三位 五十四位 五十五位 五十六位 五十七位 五十八位 五十九位 六十位 六十一位 六十二位 六十三位 六十四位 六十五位 六十六位 六十七位 六十八位 六十九位 七十位 七十一位 七十二位 七十三位 七十四位 七十五位 七十六位 七十七位 七十八位 七十九位 八十位 八十一位 八十二位 八十三位 八十四位 八十五位 八十六位 八十七位 八十八位 八十九位 九十位 九十一位 九十二位 九十三位 九十四位 九十五位 九十六位 九十七位 九十八位 九十九位 百位

ます。油繪と水彩畫との差、繪具の名前、それから調子とか色とか筆觸とか様式とかいふやうなことも、その意味ぐらゐは心得てゐなければなりません。

五 博雅の朝臣

今は昔、源博雅の朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬づのことに勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に蓬坂の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば彈丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽き

あながちに好む

て、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし」と。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとててもかくても過してん

宮もわら屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、愈、そのみやびの心に感じ、思ふやう、われあながちにこの道を好むによりて、この盲に會はんと思ふ心深し。されどこの盲の命いつまであらんも測り難し。わが命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。

かまへて

うはぐもる

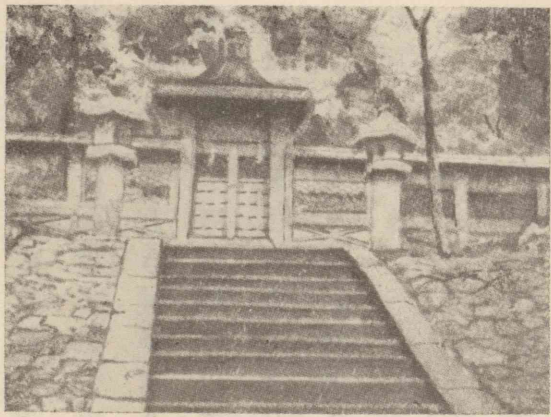
心をやる

逢坂の關のあらしのはげしきに

しひてぞあたる世をすごとて

これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知らりたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜な夜な逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密に立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅「あはれ、今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らしても、ものあはれに思へる氣色なり。博雅これを極めてうれしく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じていはく、

かたみに



蟬丸上ノ社 (逢坂山)

と思ふこと限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ。」といひければ、盲のいはく、かく申すは誰にかおはする。」と。博雅のいはく、我はしかじかの人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅流泉、啄木の手を聽かん。」といふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて件

三三三

手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれ習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふにもろもろの道はたゞかくの如く好むべきなり。それに近代は實に、然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしきものなりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になり、ければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるをや。

—今昔物語に據る—

六 我が國の音樂

田邊 尚 雄

いかなる國でも太古から今日までの間には種々多様な音樂が交替して起つたものであるが、我が國ほどその種類變化の多いものは稀である。それ許りでなく外國では古いものは大半

(一)
 理學士。東洋音樂の
 治學士。大教授。音
 跡に對する。音樂の
 が深い。日本の音樂の
 原學。音の文著
 書に對する。音樂の
 理。音の文著
 特。音の文著
 執。音の文著
 の。音の文著

即興歌

消え去つて常に新しいもののみが行はれてゐるが、我が國では二千五百年前の建國當時から各時代を通して今日に至るところの各種の音樂が大半遺存してゐて、今もなほこれ等が行はれてゐることは、音樂史上驚歎すべきことである。加ふるに古くは東洋、近くは西洋の各文明國から常に新しい樂器や樂曲を輸入してゐて、廣くその材料を世界に求めてゐる。これによつて今日我が國民ほど多種多様な音樂を行つてゐる國は世界に類例がなく、この點は實に世界に誇るに足るところのものである。

我が國上古の樂器としては和琴と稱する六絃の琴と、和笛と呼ぶ六孔の笛との二つを主要なものとするの外には見るべきものはなかつたが、時々刻々折にふれて歌ひ出されたところの歌謠はその數夥しくあつたことは、古事記、日本書紀などの古書に當時の即興歌が極めて多く掲げられてあるのを見ても判る。

然るにこれ等の古謠は大部分絶滅してしまつたことは頗る残念であるが、幸にして神武天皇御東征の際軍中で歌ひ給うたといふ久米歌と、上古の大和國の俚歌から出でた大和歌と、東國地方の民謠であつたといふ東遊との三つが今日まで遺存し、今も宮中の儀式や、神社の祭儀に行はれてゐる。もとよりこれ等はかなり後世に於て修正を加へ、大きな變化をなしたものと思はれるが、然しこれ等によつて幾分なりとも我が上古の音樂の性質を知ることが出来ることは幸である。今これ等の古謠の音樂的性質を見るに、單調なる中に、質實にして且つ雄大なる氣品に富んでゐることは、これを聞く者の齊しく感歎するところである。神功皇后新羅を征し給ひ、それより三韓が朝貢するやうになつてから、珍しい朝鮮の樂器や樂曲が輸入されたが、殊に佛教が渡來するに至つて急速に支那や印度の進歩したところの形式

管絃

的器樂が輸入され、奈良朝から平安朝の初期にかけて我が國の上層社會の人士は皆相競つてこれを學んだ。それは横笛、笙、篳篥、琵琶、箏、太鼓、鉦、鼓、鞞鼓等の樂器と合奏するを主としたもので、これを管絃といふ。また中にはこれ等の樂器を伴奏に用ひ、華麗なる舞踊を行ふものもあつた。これを舞樂といふ。當時我が國に於てもこれを模して多くの新作曲をなすに至つた。仁明天皇の時、伶人尾張連濱主が、百十三歳の高齡を以て自作の和風長壽樂を舞つた如きは、その好例である。これ等の舞樂及び管絃樂曲は大部分今日まで遺存してゐて、今上陛下の御即位式に際しても大饗宴場に於て太平樂や萬歲樂等を舞はしめ給うたことは、國民のよく知るところである。この兩樂は共に唐朝の作曲ではあるが、元來この管絃舞樂なるものは、上古より中世に涉り、支那印度を始め、廣く西域諸國に於ける文化の混一した結果の産物であ

つて、換言すれば、東洋文化の精華の混凝したものであるといつても差支ない。この貴重なる藝術が今日外國に於て悉く滅亡してしまつたのに、ひとり我が國に於てこれを保存してゐる許りでなく、その大部分が今日なほ行はれて居り、これを用ひて御即位禮の大饗宴を行はせ給ふことは、實に世界に誇るに足るべきものである。

平安朝の中頃に至り、新形式の管絃に我が國の歌謠と和して、催馬樂、朗詠などいふ新聲樂が起つて來た。これ等の聲樂と前記の管絃舞樂及び古樂とを合はせて、今日これを雅樂と總稱し、宮内省樂部を始とし、伊勢神宮、嚴島神社、四天王寺その他の社寺に於てもこれを行ひ、また民間に於ても稀にこれを嗜むものがある。然し平安朝の末期に現れたところの今様歌は殆どその正統を失つてしまつたやうである。

催馬樂
朗詠

今様歌

源頼朝が幕府を鎌倉に開いてから、政權は武家の手に移つたので従來宮廷を中心として隆盛を極めてゐたところの雅樂は漸次衰退に傾いて行き、武家を中心とするところの新藝術は未だ起らずその間には低級なる田樂猿樂の類が彼等に喜ばれてゐた。然るにこの期に於てなほ藝術の權威を保つてゐたのは佛徒であつた。抑、佛敎に於ては天平八年に波羅門僧正が印度の聲明を傳へたが、これは今に傳はるものが少く、平安朝に至り入唐求法の高僧弘法大師は眞言の聲明を傳へ、慈覺大師は天台の聲明を傳へ、この兩派は今に至るまで佛敎聲樂の正統として行はれてゐる。また古くから盲僧の間には琵琶を用ひて地神經を講ずることが行はれてゐた。これ等の聲明及び盲僧琵琶の流は遂に鎌倉時代に至つて平家琵琶を産むに至つた。これは琵琶を用ひて平家物語を語るものであつて、我が國民音樂の上に新傾向

を示すものである。

武家の音樂が向上して藝術的價値を持つやうになつたのは足利時代であつて、足利義滿將軍の頃に至つて猿樂能は發達して遂に能樂を産むに至つた。これは一種の歌劇であつてその音樂たる謠曲は佛徒の聲明の流を汲むものである。その作法閑雅にして幽邃なるは、眞に武家の性格に適應するところのものといふべきである。

應仁の亂以後は天下麻の如くに亂れ、戰亂相繼いだが、戰爭は民衆の心を刺戟するところ著しく、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が相繼いで天下を一統し、世は漸く太平となるに及んで、民衆の娛樂たるべき新音樂は忽ちにして大河の決するが如き勢を以て擴まつた。文祿年間に琉球から初來したと稱せられるところの三絃は、改良に改良を重ねて我が國民的樂器と稱せられるま

幽邃

命脈

民衆的

でになり、その音樂も唄ひ物としては小唄、地唄、長唄、端唄等を導き、また語り物としては多くの淨瑠璃諸派を起したが、その中でも大阪の義太夫節、京都の一中節、江戸の河東節、常盤津節、新内節、富本節、清元節等は天下これを知らない者がなく、らゝに擴まつた。箏樂も足利時代には僅かに九州北部の一隅に筑紫流として一條の命脈を繋いでゐたが、慶長の頃に至り八橋流起つて俗箏の基を開き、元祿年間には京都に生田檢校が出て生田流を開き、文化年間には江戸に山田檢校が出て山田流を開き、かくして箏曲は民衆的のものとなつた。かくの如く徳川時代になつて我が國民の音樂は、實に百花爛漫として咲出でたるの感がある。

明治維新以後泰西の音樂が輸入されて、以て今日に至つてゐるが、明治十二年に文部省内に音樂取調掛が設置されて、内外音樂の實情を調査し、ここに我が國民教育の上に音樂科の必要を

感じ、唱歌教育を一般兒童に施すこととなつた。爾來今日に至るまで五十有餘年の歳月を閲し、我が國民の音樂思想は著しく向上し、最近に至り新時代の日本音樂は到る所にその芽を萌して來たが、遠からずして世界の樂壇に雄飛すべき新日本音樂の出現することは、信じて疑はざるところである。

七 舟ふな

と、「まかり出でたるはこのあたりのものでござる。このぢゆういづかたへも慰にまゐらぬ。けふはいづかたへぞ遊山に出ようと存ずる。太郎冠者を喚出し申しつけませう。あるかやい。冠者「は。との誰かある。冠者「お前に。との念なう早かつた。汝を喚出すは餘の義でない。けふは遊山に出ようと思ふが、なんとあらう。冠者「内内は御意なうても申し上げうと存ずるところに、一段でござりませう。との「されば西山東山はいつものことぢや。どござりませう。違つた所へ行きたい。冠者「さればどこともとがようござりませう。あゝ、思ひつきました。西の宮へまゐらつしやれませい。との「これが一段の所であらうほどに、供の用意を仕れ。冠者「もはや用意いたしてござりまする。との「一段うい奴ぢや。來い來い。して西の宮といふ所はおもしろい所か。冠者「いや、浦山をかゝへまして、上り下りの船などを眺め、殊の外景の多い所でござりまする。との「こりやおもしろからう。やい、ここにいかい川がある。冠者「これは殿様御存じござりませぬか。との「いや、知らぬ。冠者「これは神崎の渡と申すはこれでござりまする。との「これは徒歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。冠者「いやござりまする。との「あらば急いで呼べ。冠者「畏まつてござる。や、いつもここに居るが、は、上に見ゆる。ほうい、ふなやい。との「やい、そこのなものを渡な

遊山
太郎冠者

(一)兵庫縣武庫郡。大坂と神戸の間。西宮神社がある。

(二)同縣河邊郡。西の宮の東。神崎川の渡。

ませう。との「されば西山東山はいつものことぢや。どござりませう。違つた所へ行きたい。冠者「さればどこともとがようござりませう。あゝ、思ひつきました。西の宮へまゐらつしやれませい。との「これが一段の所であらうほどに、供の用意を仕れ。冠者「もはや用意いたしてござりまする。との「一段うい奴ぢや。來い來い。して西の宮といふ所はおもしろい所か。冠者「いや、浦山をかゝへまして、上り下りの船などを眺め、殊の外景の多い所でござりまする。との「こりやおもしろからう。やい、ここにいかい川がある。冠者「これは殿様御存じござりませぬか。との「いや、知らぬ。冠者「これは神崎の渡と申すはこれでござりまする。との「これは徒歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。冠者「いやござりまする。との「あらば急いで呼べ。冠者「畏まつてござる。や、いつもここに居るが、は、上に見ゆる。ほうい、ふなやい。との「やい、そこのなものを渡な

らばなぜにふねというて呼ばぬ。冠者「いや、殿様の御合點まゐることではござらぬ。ふなやあい。」との「や、さやうに呼うだぶんでは來ないぞ。ふねというて呼べ。」冠者「いや、殿様に申し上げたいことがござる。あなたの着場とこなたの着場を、なんと申しまするぞ。」との「それな、ふねつきといふは。」冠者「さやうでござるによつて、御合點がまゐらぬこととでござる。ふなつきなどとは申せ、ふねつきと申すことはござるまい。それにつきまして、ふななどとは古歌にもござれ、ふねと申す古歌はござりますまい。」との「いらぬおのれが古歌だてではあるまいか。さりながらあらば申せ。」冠者「畏まつてござる。ふなでしてあとはいつしか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹くと申す時には、ふなではござりますまいか。」との「やい、そこな奴、汝が方にあれば、某が方にもある。ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島がくれ行くふねをしぞ思ふとあれば、おのれふねで

(一) 平安朝の歌人。
みおくやまに
みちふみわけな
く鹿の聲きく
時ぞ秋は悲しく
きての歌で知ら
れてある。

はあるまいか。冠者「いや、こなたにはまだござりまする。」との「あらば詠め。冠者「ふな人も誰をこふとかおほしまの、うら悲しげに聲の聞ゆると申す時は、ふなではござりますまいか。」との「やい、そこな奴、まだこなたにはある。冠者「あらば詠まつしやれませい。」との「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島がくれ行くふねをしぞ思ふ。」冠者「申し殿様、いや、それは最前の御歌でござりまする。」との「最前のは人丸のあそばした歌だ、今のは猿丸太夫の早歌ぢや。」冠者「いや、申し殿様、まだこなたにはござりまする。」との「もおじやるまいがの。冠者「いや、ござりまする。との「あらば詠め。冠者「ふなぎほふ堀江の川のみなぎはに、きゐつゝ鳴くは都鳥かもと申す時は、ふなではござりますまいか。」との「それは、ふねぎほふであらうがな。」冠者「いや、殿様の古歌をなほさつしやれますること、なりにくうござりませう。」との「それに待ちをる。冠者「殿の早つまらせたと見

(一) 滋賀縣栗田郡山田村。大津への所。
 (二) 渡船のある所。栗田郡老上村。一里。近江八景の一。大津への渡航村。曲三井寺の句は詠ある。

(三) 詩人。名は操。明治二十二年兵庫縣に生まれ。嘗て羅風と號した。微閑。信仰の曙。象徴詩集等の著がある。

えました。との「やれさて、いらぬ冠者と古歌だてを申して、殊の外迷惑をいたすこととでござる。や、思ひつけたことがござる、やい冠者、汝が方にふなといふ古歌が數多なれば、某が方にはふねといふことを謠にまで作りておかつしやれた。冠者、ござりませうば、うたはしやれませい。との「山田(一)やばせの渡船の夜は通ふ人なくとも、月のさそはばおのづから、ふねもこがれ出づらん、こがれをらんとはないか。冠者、申し殿様。との「なんぢや。冠者、その末は、ふな人もこがれをらんとはござりませぬか。との「なんでもないこと、すさりをろえ。冠者は。」

狂言記

八薄

路の傍に

野菊の花あまた咲きたり

三 木露風

薄尾花白く野に多く靡き
 その穂のよきに
 土地と村とのよきを感じしむ

空晴れたれど
 白雲の出でて
 廣き野の上にある
 この野家疎らなり

よく繁りたる高き榎の林
 野の中にありて
 その下蔭を行くに
 やゝ暗し

遠くの小川の灌木の繁みの路を
子供ひとり走りたるを
われは見えてあるほどに
やがて彼方の林の中に
姿見えすなれり

灌木の林を

われもまた行けば

日の光暖かに

草の香りして

足の許に落葉の音す

流るゝ水の清くして
早く行く
そこの橋渡れば
またよき林なり
鳥囀り鳴き
人影見えず
古き城の跡とも見ゆる
廣場にて我は物を思へり
草原を飛ぶ蝗よ
静かなる晝に
羽鳴らす蝗よ

その羽も黄ろく變れり

われは紅き楓の蔭に

木に凭りつゝ

下行く水の流を見る

水底に揺るゝ藻よ

日の光照りて波立つ流よ

川の彼方

稲田の見えたるに

人影もなく

古き昔を思はせ

秋の景の静けさを加ふ

我が行くに

村に入りて

子供等路に遊べり

子供等と語れば

我が心樂し

彼等石を投げ

犬と共に

田と田との間にて

秋の晝を遊ぶ

(一) 文學者。名は芳衛、高知縣の人。年五十四。著書、紅葉、白菊、花紅、日本文明史、學日訓等、著が、生訓、今桂、月全、れ十二卷に收めらる。

九 百花譜

大町桂月

寥廓

郊原一路、滿目すべて薄なり。夕陽沈まんとして、雲色哀しみ、西風冷やかにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬のいな、く聲まづ聞え、小唄聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたる儘にて馬の自ら歩むは、熟せる路にや。鳥飛びつくして四面寥廓たり。ふと顧れば、招く尾花の末に、一團の大月明らかなり。

點塵

局に對す
子を下す

雀の聲滑かなる冬の日和、日影暖かに圓窓を射て、火鉢の火も消えかゝれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁々として響く。

茅屋

桃花數株、茅屋を圍みて、鷄聲午なり。はねつるべ動かずして一

機杼

犬門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲と共に洩れ來る。

水榭
人籟

一泓の池水、半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に花あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して、人籟なし。曉煙垂柳をこめて、日未だ昇らず。

流るとしもなき

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなたは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を着けたり。流鶯時に一聲、思ひがけずも大輪の花ぼとりと水に落ちて、水暫くは文をなす。

流鶯

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世音の石像、頑としてもものいはず。側に生出でたる幾莖のをみなへし、なよなよとして風にもだゆ。

侶伴なくて詩を思ひつゝ、たどる山路、到る所櫻花多し。春風一

麥浪

遊絲

荆莽

陣空に晴雪を散らし、地に綾の筵を敷く。
 池畔の掛茶屋、少女欄により、手をうちて鯉を呼ぶ。稚兒立ちて
 麩を投ぐ。棚上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。
 麥浪に連なる一面の菜花、菜花や黄、麥浪や緑。滿地皆色あり。行
 人絶えて遊絲長閑に懸り、一双の胡蝶追逐し、去つて行く所を
 知らず。

夏の日暑く、山路峻しく、喘ぎ喘ぎ上るに、渴を催して堪難き時、
 水音聞えていとうれしく、荆莽を探してこれに就けば、急湍清玉
 をほとばしらす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を
 注げば、苔滑かなる巖の上に、百合の花危げに立てり。折らんと欲
 して折るに忍びず。立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を
 含むが如し。

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影

(整)

長き堤の上、往きかふ人なし。巨蟹はひいでて泡を吐きつゝ、はさ
 みを擧げて空を挾む。

馬に食ません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら
 刈りたる草の一束、背に載せて歸り行く田舎少女。知りてか、知ら
 ずてか、その草の中に桔梗一枝まじれり。

鸚鵡語りつくして日暮れんとす。人を待てどもいたらず。蕭々
 たる細雨、庭の秋海棠にそゞぐ。

— 春草秋草 —

自修文

福澤先生の生家

澤田謙

仲秋の或日、福澤先生の生家——少年時代を過ごされたといふ——を訪れた時ほど、私の氣持が俄然として一變したことはない。永く忘れられた回想が心の中に蘇つたからである。福澤先生の生家といふのは、八疊二間に、六疊二間くらゐの

(一)
 評論家。大衆作
 家。明治二十七年
 鳥取縣に生ま
 れた。國際政治
 の革命ムツツ
 あり。二等の著
 がある。

田舎にはよくある平凡な中流階級の住宅にすぎなかつた。記念の爲に保存してあるのであらう。住む人はない。掃除はきれいに行届いてゐた。が裏庭に廻つて、名も知れぬ野花の植つた傍に、一つの土藏を見出した時、私の足は釘づけされねばならなかつた。

「あの土藏が先生の少年時代に、勉強してゐられたところですよ。」

東道の主人は指す。

それは土藏といふよりも、むしろ一種の納屋であつた。建つけの悪い扉を、がたがたいはせながら開けると中はたゞがらんとして廣い、隅に提燈の破れたのが一つと、藁が二三束ころがつてゐた。

下はたゞの荒土、たゞさも何もない。この邊の土質として、ほ

東道の主人
案内する人はい

かほかと酸つぱい香りがする。恐らくその頃は、この中に、あらゆる家具や雑品が所せまきまで放りこんであつたのであらう。

「この二階です」

東道の主人はまた指す。

私たちは見上げた。なるほど天井が張つてある。その天井の隅に半疊ばかりの穴が口を開いてゐる。それが二階の上り口であらう。が階段も何もない。たゞ樹などにかける、半ば所々繩でつくるつた二間梯子がたててある。私はおそるおそるその梯子に靴をかけた。

その穴から覗きこんだ時、私は思はずあつと聲を發した。二階はすさまじい。屋根裏といつても情景はつくされぬ。寧ろ天井裏といふにふさはしいその室には、東向に開けられ

思索
考をめぐらすこ
と。

思想的勢力
思想の大中心を
なした大きな力。

た、三尺ばかりの窓から、うつすらと日がさしこんでゐる。その窓には鐵に格子がはまつてゐた。

如何に少年時代とはいへ、立てば恐らく屋根に頭をうちつけたらう。或は坐つてゐて背のびでもしようものなら、手をうちつけたであらう。その天井裏の薄暗い室に、恐らくは東向の鐵格子窓に机を凭せて、讀書と思索に耽けられたであらう。その少年時代の先生の姿を望見して、私は思はず、梯子の中途から友人に聲をかけた。

「これが先生の室だつたのかね」

「さうだ、さうだ」

階下からは無心の聲が應じた。

あゝ、この天井裏にこそ、明治の文明史を彩れる大きな思想的勢力が潛み且つ育てられたのだ。この天井裏に、背をこごめ

(一)名は退助。伯爵。
明治の大政治家。

て坐つてゐた少年こそ、後に獨立自尊、町人神聖の旗高く、日本を揺るがせた大福澤の前身だつたのだ。然し私の甘き回想は、それよりももつと小さなもつと眞實なものへと、頭をめぐらせたのであつた。

私の父は藏書家であつた。若くして家を繼いだ父は、青年時代すでに、板垣伯の自由黨などに熱中しただけであつて、土地では有志の一人に數へられ、一村一郡の押しも押されぬ指導者であつた。それだけに、その頃は荒れ果てた土藏に入つてみると、家重代の刀劍の傍に、板垣伯の肖像があつたり、客用の膳とやらんで大きな本箱が、不秩序にならべてあつたりしたものである。

少年時代の私は、この土藏に入ることが、一つの樂みであつた。その二階、薄暗い光をたよりにして、私は如何にその家財道

具をひつかき廻したらう。あまり刀を振りまはして、たうとう刃こぼれ三つ四つ、父に散々叱られたのを今でも記憶してゐる。私が福澤諭吉といふ名をはじめて知つたのは、その土藏の中だつたのである。

あゝ、薄暗い日光よ、その鐵格子にすりよつて、如何に少年時代の私は「福翁百話」や「學問のすゝめ」に讀み耽つたらう。夕暮の色がその小さな窓に忍びよるまでも、「瘦我慢の説」逆立は藝當にあらずなどいふ題目がいまでも記憶に残つてゐる。土藏に「おうい、何してるんだ」

外から陽氣な聲がするので、私ははつとこのとりとめない追憶から眼醒めた。

土藏の外に立つと、まだ仲秋の輝かしい陽は、福澤先生生家の裏庭に、明々と輝いてゐる。

(一)大分縣中津町にある

(一)經濟學博士、岡縣の鏡人、吉田の著者、太田正孝の爲に執筆したる本書の本文に於てある

名残りをしさうに、土藏を見返り見返る私を、追ひたてるやうにして友人は歸途を急ぐ。

耶馬溪の秋は素晴らしい紅葉で私たちを迎へてくれた。羅漢寺の奇絶は、思ふさまに好奇心を満足させてくれた。然しながら私の心は、ともすると、あの土藏の天井裏が不思議な魅力で蘇るのであつた。人間の肉體の中に蓄へてゐる不思議な力は、どんな境遇においても、育たないではおかないものだ。

歸途の自動車の中で、私は獨りこんなことを考へてゐた。

一〇 町人の説

太田正孝

「町人」といふ語は、とかく賤しい言葉であるやうにひびく。おもふにそれは、徳川末期の町人たちの無知と墮落とから出てゐる。賤しい、軽い、さげすまるべきものである。もつとも一口に町人と

社會の先達

心術

いはれるものうちに、心の清い豊かな男もあつた。當時において男を賣らうとした町奴が、それである。彼等は、自由で、とらはれてゐない。つねに廣い心持が宿つてゐる。人爵などをそつちのけにした原始の儘の大自然のうちに生まれついた心境にゐる。殿様も、武士もこはくない。加賀様の前に呼出された俳人一茶が、うぐひすや御前へ出て同じ聲といつた氣分である。明治維新以來、新日本を建設する爲社會の先達をもつて任じた福澤諭吉翁が自ら「町人諭吉」と稱したのもかういふ考から出てゐたのである。

然し、町人は禮儀作法を重んじなければならぬ。言語動作をつつしまねばならぬ。町人は自由人ではあるが、身だしなみが大切である。禮を知り、序を知り、分別を知ることとを要する。福澤翁が「いやくも立身出世の心あるものは、その心術を元祿武士にして、

素町人

自由人

その働を小役人素町人にしなければならぬ」といはれたのは、誠に含みの多い言葉でなからうか。

立職業に上下貴賤の別を立てるのは、よくないことである。福澤翁はいやくも、わが身にかなふ仕事であつたならば、進取一方を決して、左右を顧ないことであるとしてゐた。しかもその中にたゞ一つ大切なことは、獨立の大義を忘れることなく、君子の風を存して處してゆかなければならぬといはれてゐた。所謂福澤翁の獨立自尊の大義は、この意味において町人の本領を表現してゐるものである。そして、この獨立自尊こそ、言行一致、福澤翁の一生を通ずる魂の聲となつたのである。

一體、町人の心をみたまふべき自由とは、何を意味するのかわかつてゐるやうで、その説明はむづかしい。やゝもすると、まちがへられることである。プラトーンが「理想國」といふ本のなかにも書

(1) Platon, ギリシヤの哲學者。(西曆前四二九—三四七年)

自由人

いてあるやうに、自由は「わがまゝ」と穿きちがへられやすいものである。しかも、とかくさうなりがちである。これは自由の海に遊ぶものは、自由の水に溺れやすいといふ道理から出てゐる。わがまゝや仕放題は、決して自由ではない。自由の極は、恐るべき暴政となり、無政府ともなる。個人の自由を認め、精一杯働かすことによつて、いまの經濟界は榮えて來たのであるが、資本家にも労働者にも、勝手氣まゝをさしてゐては、決して最後まで伸びてゆけるものでない。この意味において、お互の住んでゐる世の中は、お互自身が主人となつて治めてゐるといふ心をもたねばならぬ。自由人は自らの社會を自ら治めてゆくのである。自ら秩序を立てて、一言一行みな責任を負うてゆくのである。自分で自分の働く繩張りをきめてゆくべきであるにもかゝらず、ときには境を越して仕放題になるのが世の常である。はては境をつくつ

權化

たことを忘れてゐるものさへある。かうして自由をもつ町人となるには、常識が豊かでないければならぬ。明治の初め西洋人が如何にも偉いやうに見えたのは、かういふ常識が發達してゐたからである。錢をもつて賤しいとするのが、我が國における永い間の風習であつた。階級的にも、士農工商といつて、實業を輕んじたものである。それが福澤翁をして憤慨せしめた原因であり、この誤を強調した爲に、翁の心の底を讀み得ないものは、拜金主義の權化である。と解し、社會の風上にも置けないとまで評したものである。翁の説いた學問にしても同様で、所謂實學問こそ學問の本格であるとしたのである。學問は活用されて貴くなる。糸をつくらない蠶が何になる。生計を知らない學者は無用の長物であると極言したほどである。そして「翁は、文明男子の目的は錢にあり」と斷

じ、金銭は決して賤しくないものであるとした。これを賤しいものとした徳川の世がちがつてゐるといつたのである。もつとも、翁の説き方は何事にも概して強すぎるきらひはあつた。尾崎行雄氏が青年時代に一書を著はさんとしたときも「猿を相手にして書け」といつたほどである。とにかく翁の目ざしたのは、文明を買ふ銭を得ることにあつた。そして買つて得た文明によつて、さらにまた「銭」を生み出さうとしたのである。ひるがへつて當時の日本を見れば、智あつて財を生むすべを知らぬ上流と、財を生むことを知つて活用することを知らぬ下流の二つから成つてゐた。その上流は理財を談ずることをもつて士君子の恥とし、下流に至つては摺み得た財を酒色に流してゐる始末である。だから翁は新文化開拓の爲には、「銭」の意味から教へてかゝらねばならぬとし、自らも町人と稱し、身を市井においたのである。翁は、まさ

理財

Citysn.

金字塔

經濟人

しく町人として、人間そのものの生活を樂しむの法を、身を以て示したのである。町人といふのは、市民の謂である。シティズンである。地位や階級を超越した自然人のことである。翁は無位にしてえらかつた。無爵にして貴かつた。明治時代を通じての民間における第一人者であつた。あはれ、町人諭吉の四字は、千古に輝く金字塔ではなからうか。

私は經濟界の活動は人にあり、しかも明治維新が政治の改革を意味するとともに、國民生活の根柢を形づくるべき經濟人が舊來の心根をもつてしては如何ともなしがたいことを知つてその改革を目論んだ福澤翁の苦心を思はざるを得ない。もしも我が國において開國以來經濟上の進歩の著しいものがあるとするれば、町人をつくらうとして町人の典型となつた翁の偉大さを偲ばざるを得ないのである。

一一 秋の歌、冬の歌

(一) 近江國滋賀郡
琵琶湖の西岸。

(二) 歌人。古今集撰
者の一。

うづら鳴く眞野の入江のはま風に
尾花をみよる秋のゆふぐれ
藤原俊成
ゆふされば野への秋かぜ身にしみて
うづら鳴くなりふかくさの里
みどりなる一つ草とぞ春は見し
秋はいろいろの花にぞありける
壬生忠岑
山里はあきこそことにわびしけれ

(一) 對馬守。歿年不詳。

(二) 參議資房の男。四位少將。

(三) 歌人。天保十四年(一五〇三年)歿年七十六。

鹿のなく音に目をさましつゝ
山ふかみおちて積れるもみぢ葉の
かわける上にしぐれふるなり
藤原資宗
いかだしよ待てこととはん水上は
いかばかり吹く山のあらしぞ
香川景樹
照る月の影のちりくる心ちして
よる行く袖にたまる雪かな
西行法師
津の國のなにはの春は夢なれや
あしの枯葉に風わたるなり

一一一 いちひの樹

吉田絃二郎

洛北大原の里に寂光院をたづねた翌日の午後鷹ヶ峰に光悦

寺を訪れた。



その日は京の時代祭といふので、朝のうちから京都在がなんとなく落着かぬけはひであつた。朝、夜が明けたばかりに代 起きて、冷たい霜を踏んで三條の大橋を渡り、知恩院の木魚の音を聞いて大津行の電車通りにさしかゝつた頃は、甲冑に身をかため、馬の口を取らせて、悠々と板橋を鳴らす騎馬武者などに逢つた。

秋の日は靜かに京の町を照らし始めた秋の行樂にこの上も

(一) 小説家。早稲田大學教授。名は源次郎。明治十年佐賀縣磯子に生れた。草光。芭蕉等の命の著がある。

(二) 京都府愛宕郡。

(三) 十月二十二日。

(四) 京都市上京區。賀茂川にかゝつてゐる。

(五) 下京區林町。浄土宗。西派の總本山。

行樂

(一) 上京區北野の北野神社。
(二) 禪宗。北山の麓にある。

(三) Tennyson.

イギリスの詩人。(西曆一八〇九年—一八九二年)

(四) In Memoriam. 友人ハラムの死を悼んだ詩。西曆一八五〇年の作。

(五) Artnar Hallam.

西曆一八二九年エミリー・テニソン嬢と結婚し、テニソンとの親交は更に姻戚關係となり、一八三三年ベネチア(Venice)で客死した。

ない好天氣である。

北野の天神から金閣にまはり、三かゝへも四かゝへもありさうに思はれる金閣の玄關の前のいちひの樹の下では、思はず足を引きつけられてしまつた。

テニソンのイン・メモリアムの中の句を思ひ出したのであつて、老いたいちひの樹は、春が來ても、いつも憂鬱な顔をしてゐる。そして、網の目に張られたその廣い深い根は、幾多の人々の亡骸を包んでゐる。それはテニソンの無二の友アーサー・ハラムを葬つた寺の庭のいちひの樹を形容したものであつた。そこからはいつもの悲しい鐘の音が聞えてゐた。

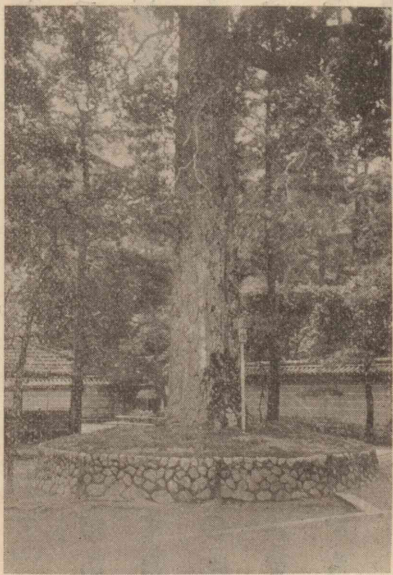
私はいつも、いちひの樹を考へるたんびに、テニソンが描いたお寺の庭の憂鬱な樹を聯想してゐた。

然し、金閣の玄關の前のあの亭々として、なんのわだかまりも

なく伸びて、そして思ふ存分東西南北に、素直に枝を擴げてゐる
 老いちひの樹を見てゐると、どうしても憂鬱な顔を聯想するこ
 とは出來ない。明るくて靜かで、それかといつて輕くもなくどつ
 じりした落着を持つた空
 氣に包まれてゐる金閣の
 老いちひの樹は、いつも柔
 かな深い小影を、白い砂の
 上に投げてゐる。

そこには、どこまでも足
 利時代の寂びが漂うてゐ

る。平家の天下は花やかであり、豪快でもあつたが、まだなんとい
 つても成上者なげりの共通なざわめきがあつた。日本人がほんたうに
 ものの味をその底に徹して味識あじしすることを知るやうになつた



樹のいちひの閣金

豪快

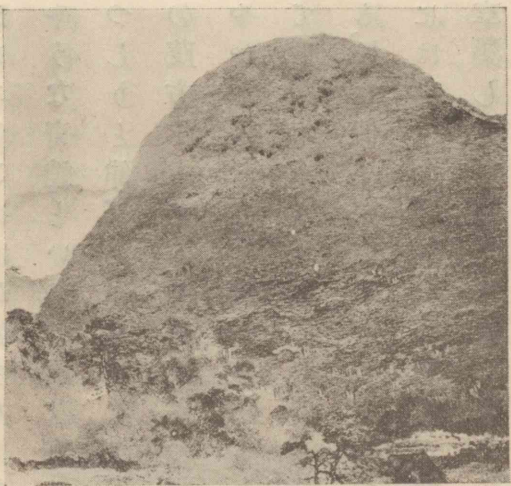
味識

奇峭

喧騒 惱亂 享樂 凝諦

のは、足利頃からであらう。

さういふ意味で金閣の玄關のいちひの樹を見てゐると興味
 がある。そこにはかの古木にありがちな嵐にたゞきつけられた
 やうな奇峭キウキウといつた風な感じもない。枝も幹も靜かに、しかも、ど
 つしりと伸びてゐる。すくすくと聳えた幹に對して枝の張方、葉
 の茂方すべてが、圓滿具足の形である。さうかといつて、決して花
 やかでもない。微塵の浮薄さもない。一枚一枚の葉は、樅の葉に似
 て重厚であるが、更に形良く精練されてゐる。幹を包む皮にして
 も、樅に似て堅いが、もつと整つてゐる。磨きがかゝつてゐる。そこ
 には喧騒ケンソウや惱亂ノウランを聯想する何物もない。人生を厭離イヤリもしない、
 享樂キョラクもしない。悲觀ヒコウもしない、樂觀レキケンもしない。ひたすら透明
 な智慧の空氣に浸されて、悠久ウキウを凝諦ネイテしてゐる大禪師の面影で
 ある。哲人のそれである。



(筆童竹口谷) 山笠衣

裏の木立に包まれた茶室を訪れて茶を喫する。この前訪れた時には、一人の老翁が茶を立ててくれた。老翁にはたゞ一人の男の子があつたが、東京の大震災で行方不明になつて、一年経つても消息もないといふ話を聞いたことがあつた。今度もその老翁がまだゐるのであらうと思つて立寄つて見たが、もうその老翁はゐらないで、元氣な中年の男が茶を立ててくれた。老翁のことをたづねて見ようかと

思つたが、止してしまつた。

金閣を辭して、茅、薄などの道をめぐり、朱に染めた格子戸の家

續きの町を過ぎると道は歩一歩と、爪先上りの、左手には近く衣笠山、右手には遠く比叡。振りかへれば賀茂川を挟んで京の町が、秋の日の下に擴がつてゐる。登るにつれて家はまばらになつてくる。修竹の林を切開いて家を建ててゐる所もある。人夫たちが五六十人もひとかたまりになつて、土を運んだり、崖を崩したりしてゐる。鞍馬口あたり、八瀬あたりの道が白く稲田の間を貫いて、南北に走つてゐる。

桐の畑がある。茶の畑がある。山城の山が大和の山が、そして、このそれとも知れぬ白い流が、もやの下に漂うてゐる。二條の皇城も東寺の塔も。

一三 みやび

延喜時代の歌人凡河内躬恆は、

てる月を弓張ともしもいふことは

山邊をさしていればなりけり

の歌に天皇の感賞を得た。武人で歌人であつた平忠盛の

(一) 清盛の父。仁平三年(一一八一年)歿。年五十八。

ありあけの月も明石の浦風に

波ばかりこそよると見えしか

同じく武人で歌の名手と稱へられた源三位頼政の

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

(二) 頼光の玄孫。承安四年(一一八四年)平氏を討たうとして兵を挙げ、敗死した。年五十七。

いづれも時にとつての面目を、雲居の空に施したのである。

一條天皇の御世に中將實方卿が一時の感情に激して、藤原行

面目を施す
(三) 近衛中將藤原實方歌人。長徳四年(一一六五年)歿。

(一) 第八十代。衛士

寛弘な御徳
(二) 聖武、孝謙兩朝の元人。天平安和七年(一一七四年)歿。



(筆溪香我久) 向 下 州 奥 方 實

成卿の冠を打落したが、行成は少しも騒がず、笄を取出して冠を直した。天皇は御簾の隙からこれを御覽になつて、行成は心優なるものである。實方は陸奥の歌枕見て参れ。とて、陸奥へ遣された。とある。歌枕見て参れとの仰、なんと、いふ優しいお言葉であらう。高倉天皇の御代に、衛士が御苑の紅葉を焚いて酒を酌みかはした。天皇は、林間煖酒、焚紅葉、と白樂天の句を誦して、風流なものよ、と仰せられた。なんと、いふ寛弘な御徳であらう。天平十八年正月雪の降積つた朝、橘左大臣諸兄以下が上皇の御宮に参つた時、おのおの歌を作れとの仰。思ひ思ひの作があつた中に、橘左大臣は

降る雪のしら髪までに大君に
つかへ奉ればたふとくもあるか



(一)五十九代。

世から始つたとか。まして南殿の花の宴をりをりの舞樂の花や

と歌つた。白髪の老臣が君恩を
喜んだ有様が、目に見えるやう
で、君臣和樂の親みが思ひやら
れる。

南殿の花の宴を始として、雪
の旦、月の夕べ、天皇が群臣を召
して詩歌、管絃の風流を盡くさ
せられたことは、中古時代の常
であつた。九月十三夜の後の月
を賞することは、宇多天皇の御

雅懷

かさ、きら、かさは想像するに餘りある。後醍醐天皇が吉野山に
雲居櫻を御觀じて、

ここにても雲居の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

と仰せられた御雅懷は、聞く我等には悲憤の涙も添ふ心地がす
る。歴代の天皇が風雅韻致に富ませられ、殊に和歌に堪能でいら
せられたことは、世界各國の帝室に例のないことであらう。

和歌は我が國固有な文學で、上下幾千載の歴代の文學を縦に
貫き、横に貫いてゐるものである。漢文を主とし、漢詩を作ること
の大いに行はれた時代でも、和歌は固有な文學として常に行は
れた。延喜時代に始めて古今集の勅撰があつてから、續いて後撰、
拾遺と鎌倉の始頃までには八代勅撰集が、院宣或は勅命によつ
て出來上つた。承久の役の三上皇后鳥羽順徳、土御門は殊にこの

道に堪能でいらせられた。敷島の道といふ名稱もこの頃から起つた。和歌を日本固有な道と稱へたのである。勅撰集の撰集があつたことは、朝廷と和歌とに少からぬ關係を有せしめた。一首でも勅撰集に採られることを非常な名譽と感じた。もともと古來の忠君心から出たのではあるが、撰集に入つて歌名を後世に傳へることは、武人が戦場の功名よりも一層な名譽であつた。平家の都落の際、平忠度が途中から引返して、夜千載集の撰者であつた俊成卿の門を叩いてその歌集を託し、死後一首にても入選の榮を得しめ給へと頼んだのは有名な話である。勅撰集は二十一代集までを數へて、その後は絶えたが、天皇をはじめ奉り、攝關以下公家の人々は、代々皆歌の嗜があつた。皇室と和歌、實に離るべからざる聯想がある。萬世一系の皇統、太古以來の文學、列聖の御歌、和歌に伴なふ歴代の佳話、これ等は皆我が國の古代を思念せ

(一) 忠盛の子。清盛の弟。壽永二年(一一八四年)谷に戦死した。

公家
列聖

しめるものである。百人一首の歌ガルタが、永く弘く國民の間に喜ばれるのも、ここにその意義がある。

一たび古代の語に綴られた三十一文字の音響に觸れ、ば、思は遠く平安時代の昔に遡る。徳川時代に入つては、歌學の研究は進んで國學となり、大いに忠君愛國の思想が鼓吹されることとなつた。幕末勤王の士は皆和歌を口ずさんで、その忠君愛國心を吐露した。かくして皇室は道德の本源であらせられたばかりでなく、また風流文雅の中心であらせられたのである。文藝ばかりではなく、音樂禮儀一切の有職の淵源であつた。兵馬の權が武門に移つて後も、一切の名譽、光榮の中心は朝家にあつたのである。武家時代に生まれた人々も、皆みやびの心をもつて朝家を仰ぎ、古代に憧憬したのである。みやびは宮びで、宮中のふりといふ意義である。

國學

吐露す

有職

(一) 俳人。名は藤吉。明治七年東京に生まれた。自然の俳句と俳句の観音巡禮等の著がある。

(二) 俳人。寶永二年(一七二五年)歿年七十二。

(三) 俳人。向井氏。蕉門十哲の一。寶永元年歿。年五十四。

(四) 俳人。芭蕉の高弟。歿年不詳。

(五) 俳人。斯波一有の妻。享保十一年(一三八六年)歿。年七十四。

(六) 俳人。安永四年(一七九五年)歿年七十五。

(七) 俳人。其角の門人。享保十年歿。年五十七。

(八) Type. 織細

一四 女流の俳人

萩原井泉水^(一)

女流の俳人は古來甚だ少い。芭蕉の時代には乙州の母の智月^(二)、尼去來の妹のちね、凡兆の妻の羽紅など、七部集の中にもその句が見えてゐるし、伊勢の園女や、加賀の千代女や、江戸の秋色女などは、逸話などを以てその名が著れてゐる。これ等の女流を一家として見ると、さして秀でた人はいやうであるが、女は女だけに感情の調子が柔かくて、潤がある。それは枯木に時雨の音を聞くやうな閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍しく、寒椿の一二輪を見るやうな氣がする。

女流の俳人には二つのタイプがある。一つのタイプは弱々しく、繊細で、若くて佳い句を残して若くて死んでゆく人である。ちねも三十にならずして死んだらしく、文政年間の花讚女も二十

(一) 俳人。田氏の女。元禄十一年(一七〇五年)歿。年六十五。

(二) 俳人。市原氏。慶應元年(一八二五年)歿。年九十。

貞淑

三で死んだ。他の一つは、夫に別れてから孤獨の心を俳句で慰めて、隠遁的に安住したり、または髪を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つてくる。このタイプの人は皆長生をしてゐる。園女は七十四、智月尼も同齡、千代女は七十五、捨女は六十五、^(三) 代女は九十歳までも生きた。

園女は伊勢の松坂の人で、晩年芭蕉がその家に立寄つた時、白菊の目に立てて見る塵もなし、といつて賞讚した句で見ると、いかにも貞淑な清艶な婦人であるらしく思はれる。

寝どころへ扇にすゑし螢かな

紅さいた口もわする、しみづかな

かうした句も女らしい。芭蕉はこの時、園女亭で饗應を受けた膳の中の菌にあたつて、大阪に来てから發病して、遂に世を去つたのであつた。師を思ふことに厚かつた園女の悲嘆と悔恨とが思

生業

逸脱

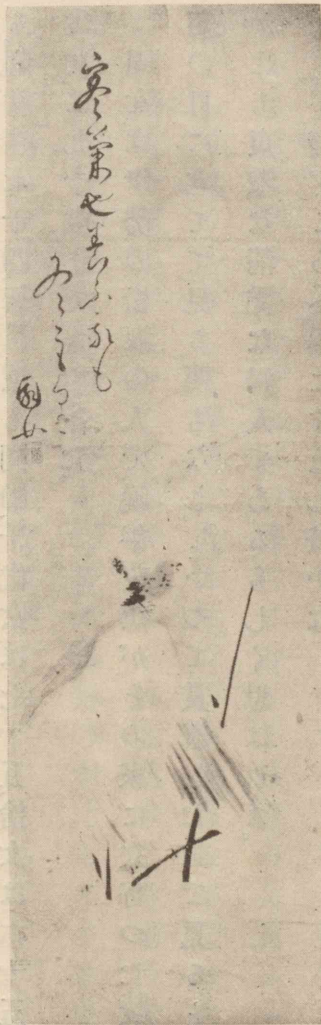
ひやられる。その後、園女は江戸に出て深川に住み、眼科醫を生業とした。また禪を學んで、智鏡尼と名を變へた。剃髪をした頭上にわざと十本許りの髪の毛を残して置いたといふのでも、晩年には餘程逸脱して、女ばなれがしてしまつたやうである。

寒菊や養ふ

我も冬こも

り

園女



筆 女 園

芭蕉の遺骸は大阪から川船で大津の乙州の家へ届けられた。法衣(芭蕉の好みとあつて、特に茶色の布を選んだ)を縫うたのが智月尼であつた。芭蕉は曾て智月尼から記念の書を乞はれた時、

「六十に近き人に形見を乞はれていとかなし。我先に死ぬといふことにや。」と戯れながら、書いて與へたといふ話もある。

山ざくら散るや小川の水車

雲のまの星見てゐるや時鳥

あき入よ



筆 月 智

智月尼の句には美

しい繪畫がある。

秋色は江戸照降

町の菓子屋の娘で

あつた。十三の時、上

野の花見に来て、井戸端の櫻あぶなし酒の酔。といふ句を詠んで、俄に名高くなつた。その對象になつたといふ櫻は、今も清水堂の裏手に秋色櫻として残つて居る。

底白にべにはきのこすつゝじかな

(二) 清水觀音堂。東
京市下谷區、上
野公園にある。

(一) 日本橋區。

あき入にと
んとめいた
り小鳥とも
ち月

すゞしさや日の落ちかゝる海の上

筆色秋

(一) 氷上郡

などが、この人の句として推すべきものであらう。捨女は丹波柏原(たにばかしら)の人で、六歳の時に、雪の朝二の字二の字の下駄のあと。といふ句を詠んだといふほどだが、その作風は、うきことになれて雪間の嫁菜かな

といふ風で、女らしくはあるが、句としては感服が出来ない。この

筆女捨

(二) 掛保郡

おもふ事なき顔しても秋の暮ステ

人も剃髪して、播州の網干(あみこ)に庵を結んで、長生した。

凡兆の妻の羽紅は、

霜やけの手をふいてやる雪まろげ

縫物や着もせでよごす五月雨

などで見ると、良妻賢母らしい。

當時の女流俳家としては、なんとしても加賀の千代が傑出して居る。千代の句には、女らしい優しさが生きてゐる。

蝶々や何をゆめみて羽づかひ

とぼし灯の用意や雛の臺所

夕顔やもののかくれて美しき

かういふ句には、どうしても男には詠まれない女性獨得な境涯がある。然し、この優しい感情が、動もすると女らしい小心や、女らしい注意となる。

白菊や紅さいた手のおそろしき

根をつけしをなごの慾や董草

それがまた神経質過ぎる思ひやりともなる。

朝顔につるべとられてもらひ水

これは千代の名と共に普く知られてゐる句であるが、どうも優し過ぎて、この優しい氣持を見て下さいといふやうな誇張の見えるのが厭みである。

千代は松任(一)の産で、幼少の時から句を好んだ。支考(二)の門人盧元坊といふものが松任に來た時、千代はその旅宿を訪うて、始めて教を乞うた。その時、時鳥といふ題で苦吟して夜を徹した後、

時鳥時鳥とて明けにけり

と作つて、その才を認められたといふ話もある。子を亡くした時

蜻蛉釣けふはどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

(一) 石川縣石川郡。金澤の西南三里餘。

(二) 姓は各務。俳人。芭蕉十哲の一人。享保十六年(二六三九年)歿、年六十五。

苦吟

剃髮して妙林尼と號した時、

髪を結ふ手の隙あいて火燧かな

これ等はいづれも人口に膾炙してゐる。作者の實感が殊に人情味が強く出てゐるところが人を引付ける。然し、その人情味がその句を通俗化させてゐる所以でもある。

女流の俳人で最も多く佳い作を遺した人としては、私は寧ろ後代の多代女を擧げたい。

多代女は岩代國須賀川の人、市原氏である。三十一の時婚を失つてから、乙二の門に俳諧を學び、晩年江戸に出て諸俳家と交つた。

空にみち空にきゆるや御忌の鐘
根に雪のはきためてある椿かな
行くもくるもみな春風の堤かな

膾炙

(一) 岩瀬郡。
(二) 岩手縣白石の人。松憲と號した。文政六年(二四三九年)歿、年六十九。

客観的

ありあけの野ずるに白し春の水
句風が一體に客観的で、引きしまつてゐて危げがない。これほど
しつかりした句を作つた人は、曾て女流にはない。然し、それだけ
女らしいところは少しもない。

生きすぎて我も寒いぞ冬の蠅
かの女は九十歳まで生き、生前に自分の句集も出して、慶應元年
に死んだ。

一五 秋の句、冬の句

- (一) 江戸時代初期の國學者。俳人。北村氏。寶永二年(一三六五年)歿、年八十二。
- (二) 俳人。三浦氏。安永元年(二四三五年)歿、年二十五。
- (三) 俳人。藤原氏。天明四年(二四四年)歿、年二十四。
- (四) 俳人。星布女。榎本氏。文化十一年歿、年不詳。

まざまざといますがごとし魂祭
大空やひとり更けゆく高燈籠
相照らす夜の野川や天の河
朝顔の影をまきこむすだれかな

星^(四)保^(三)樗^(二)季^(一)

布吉良吟

(一) 傳記不詳。

- (二) 俳人。堀田氏。天明三年歿、年六十三。

(三) 芭蕉の門人。

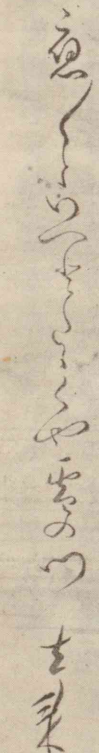
- (四) 俳人。高井氏。燕村の高弟。寛政三年(二四五年)歿、年四十九。
- (五) 俳人。宮城氏。正徳四年歿、年不詳。

應々といへ
とたたくや
雪の門
去來

- (六) 俳人。久村氏。寛政四年京都で歿した。

負うた子に教へられけり三日の月 古^(一)
黄菊白菊そのほかの名はなくもがな嵐^(二)
蘭の香や袴着習ふ女のわらは
あかあかと日はつれなくも秋の風
あき風や茄子の数のあらはるゝ
足はやき雲のけてゆく鳴子かな
ものの音ひとり倒るゝ紫山子かな
行く秋を尾花がさらばさらばかな 一 凡^(五) 凡^(四) 木^(三) 芭^(二) 麥^(一)
しぐるゝやもみの小袖を吹きかへし去

來茶兆董白蕉水雪友

つらつらと杉の日表ゆく時雨 曉^(六) 臺

筆來去

- (一) 俳人。山本氏。熱田の人。歿年不詳。
- (二) 上島氏。元文三年(二五八年)歿年七十八。
- (三) 俳人。高桑氏。寛政十一年歿年七十三。
- (四) 俳人。僧侶。元禄二十六年歿。三十。
- (五) 俳人。春秋庵。寛政三年歿。年五十三。

こがらしに二日の月の吹きちるか
 水鳥の重たく見えて浮きにけり
 水底を見て来た顔の小鴨かな
 枯あしの日に日に折れて流れけり
 蕭條として石に日の入る枯野かな
 からびたる三井の仁王や冬木立
 氷る夜や諸手かけたる戸の走り

(一) 荷 (二) 鬼 (三) 丈 (四) 關 (五) 其 白

今 貫 草 更 村 角 雄

東都なる英一
 蝶が畫に讚は
 てまれば月
 四五人に躍
 落かゝる躍
 るかな
 蕪村

東都なる英一
 蝶が畫に讚は
 てまれば月
 四五人に躍
 落かゝる躍
 るかな
 蕪村

雁さあぐ鳥羽の田面や寒の雨

芭

蕉

筆村蕪

自修文

俳句評釋

(一) 沼波 瓊音

- (一) 俳人。國文學者。名は武夫。昭和二年歿。年五十二。芭蕉の臨終。しる棒の徒然草。話等の著がある。てにをは助詞。
- 片言 不完全な語。
- 判じもの 考へもの
- 直覺 感覺の作用で直接に知ること。

俳句は、どうも初のうちはなんだからわかりにくい。てにをはが省いてあつて、片言のやうでもあり、判じもののやうでもあり、或は謎のやうでもあるといふ感じを、誰も持つものであるが、決してさうではない。俳句は讀むべきものではなくて、味はふべきものである。理窟をさつぱり除けてしまつて、直覺的感情を基として作りもし、味はひもするものである。自分ではふに限る。だから極端にいへば、俳句を解釋するのは無意味だともいへる。それで、ここにはたゞ字句の意義などについて、一通りの解釋を試みようとするだけである。

春

高麗船のよらですぎ行く霞かな

蕪

村

聯想
一つの考にととも
なつて、他の考
がよび起される
こと

霞みわたる
一面にほうつと
かすんである。

高麗船といへば、神功皇后の三韓征伐の少し後頃に、高麗から貢物を持つてくる船が聯想せられます。高麗船といふのは、非常に華やかに飾つた船でありませう。それを或人が、春の霞みわたつてゐる日に海岸で見えてゐることを想像する。向うの霞の中から、高麗船が非常に綺麗な帆を掲げて沖に現れた。もうこの港へあの船が着くだらうといふので、その頃の悠長な人が海岸に待つてゐる。さうすると、その待つてゐる港へは着かず、ずつとそこを通つて、また向うの霞の中へ入つて、見えなくなつてしまつた。さういふ有様を詠んだのです。高麗船のよらですぎ行くといふ一つの事、それを覆ふのに霞を以てしたので。高麗船がいかにも春の景色に適當してゐる上に、「よらですぎ行く」といひますから、見てゐる人は長くそこに待つたものと見える。非常に長閑な日の景色であります。

蕪村 春の水山なき國を流れけり

(一) 新派の對。一般
に正岡子規の革
新一派を指して
いつてゐるやう
である。

俳句の題
季題。即ち俳句
で、句に詠入れ
ない。四季の景
物感れる。

所謂舊派の人たちは、蕪村の句を好みませんが、この句などは、舊派の人にも賞められて居ります。春の水といふのは、俳句の一つの題になつて居ります。春の水は、春の河でも春の湖でもなんでも宜しい。温さうに流れてゐる春の水を總稱していひます。ここでは川でありませう。春の川が廣い廣い限りなく廣い平野を遙かに遠い所へ流れてゐるのを見わたした景色であります。山なき國といつてあるが、もしこれを「廣き野原」としたらどうでせう。春の水廣き野原を流れけり。見てゐる景色は同じであります。が、「廣き野原」と「山なき國」とは、感じに非常な違があるのです。實際ゑがいてゐる景色は同じでも、言葉の遣ひ方が大變違ふ。この方が強い感覺を與へます。

夏

さび
古びて寂しい趣。
酒々
水の盛んに溢れ
るさま。

なぶらる
もてあそばれる。

五月雨をあつめてはやし最上川 芭蕉
これも名高い句であります。最上川は羽前を流れてゐる大河であります。奥羽地方といへば、なんとなくさびた感想が浮かぶ。そこに五月雨が降つてゐる。その五月雨を集めて、酒々と早く流れてゐるといふので、莊嚴な句になつて居ります。
負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな
暑い時に子を背負つてゐる、たゞそれだけでも、だくだく汗が出ます。ところがその背中の子は、じつとして居りません。背中の上でいたづらをして、髪の毛をいちぢつてゐる。髪をなぶられる。そのなぶられるのがいかにも暑い。そこを詠んだのであります。うるさいといふことと、暑いといふことを結び附けたのです。作者が女だけに、いかにも女らしい着眼をして居ります。男ではかういふ句は出来ないかも知れません。

秋

雄渾
勢雄々しくよど
みないさま。
(一)許六編の風俗文
選に出てゐる。
半天
ながぞら。中空。
運びて
浪の音ばかり聞
えてきての意。
魂けづる如く
あまり悲しく寂
しくて胸のせま
るさま。
草の枕
この枕は、旅寝
の意。

荒海や佐渡に横たふ天の河 芭蕉
この句は、越後の國の海岸から佐渡が島を望んで詠んだものであります。日本海の浪が荒く立騒いでゐる。さうして銀河が天から佐渡が島へかけて横たはつてゐるといふ景色であります。浪の音もどうどうと聞えてゐる。銀河が斜に佐渡が島にかゝつてゐる。佐渡が島も、暗い晩でありますから、ぼんやり見えるのであります。大變雄渾な句であります。この句の前に、銀河の序として芭蕉は、
窓押開きて暫時の旅愁をいたはらんとするほどに、目す
でに海に沈みて月ほの暗く、銀河半天にかゝり、星きらきら
と冴えたるに、沖の方より浪の音しばしば運びて、魂けづる
如く腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば、草の枕も定まらず、

墨の袂
墨染の衣の袂。

自然に發した聲
思はず發した聲。

George Gor
on Byron.

墨の袂、何故とはなくしてしぼるばかりになん侍る。」と書いて居ります。腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば、といふやうに、非常な雄渾な景に感じて涙を流すといふ折に、自然に發した聲がこの句になつたのであります。古今の俳句でこの句のやうな莊嚴なものは恐らくないでせう。海を詩題とすることは、英國の詩人なども盛にやつて居り、殊にバイロンはをりをり海を題にして居りますが、然し、かくの如き雄渾な景色を、かく簡單に叙したものは、恐らくないだらうと思ひます。

蜻蛉つりけふはどこまで行つたやら 千代

これは千代が、自分の子供を失つた後に詠んだ句であるといはれてゐます。いつも蜻蛉を釣りに行つては、遠歩きをしてなかなか歸つて來ない。けふはいつまで待つても歸つて來ないが、一體どこまで蜻蛉を釣りに行つたであらうかといつた

のであります。これは母親が子供を失つた後、まだ生きて居つてどこかへ行つてゐるやうな氣のする、その瞬間の情を叙べたのであります。始終傍に親しんだものの死んだ後には、ふとかういふ感じがするものです。

木枯らしの音
水

言水筆

冬

木がらしの音はありけり海の水

木枯が永く永く吹續いてゐる。非常な音をして吹いてゐる。その中に暮方にでもなりましたらうか、その木枯が止んだのです。世間が靜かになると、向うの方で「どう」といふ音がする。それは海の浪がまだ騒いでゐるのであります。さういふところ

(一)池西則良。奈良の俳人。享保四年(二二七九年)七十三歳で歿した。世間
ここではあたり
一帯の意。

を詠んだので、木枯が非常な勢で吹いて、吹静まつたが、その結果は海の音になつたといふのであります。この句は當時大變評判になりました。その爲に「木枯の言水」といふ異名を附けられたといふことでもあります。

應々といへどたゞくや雪の門去 來

雪の降る晩に、誰か訪ねて來た。とんとんと門をたゞきますから、應々とこちらで返事をして、まだ頻りにたゞくといふ句意で、家の中から詠んだのであります。外の人は寒氣に堪へかねてたゞくのもありませうし、また雪の爲に聲が聞えないので、それで頻りにたゞくのもありませう。鉢(一)の木にも、餘りの大雪に、申すことも聞えぬげに候ふとある。非常に雲が降ると聲が聞えませぬ。それでたゞく、兩方の意がありませう。大雪の態をよく表してゐる。この句に就いて、俳諧蒙求にこんな

(一) 謠曲。

聞えぬけ
聞えない様子。

(二) 一卷。岡西惟中の著。俳諧學者の参考書。

(一) 市都市の西郊。

(二) 望月氏。近江大津の人。蕉門の門人。

絶唱
非常にすぐれたよい詩歌。
自負
自らほこる。

類火

話があります。去來が嵯峨に居つた時にこの句が出来た。非常に得意で、雪は降らないか知らんと思つてゐたが、夜になると果して大雪で、一尺許り積つた。これはいい鹽梅と、早速木節(二)の所へ訪ねて行つた。戸をたゞいてもなかなか開かない。これは故意に聞えぬやうにたゞいたかも知れませぬが、頻りにたゞいて、遂に中へはいつて、この句を出した。そしたら、木節大いに驚き、手をうつこと數十、跳り上りて狂するが如し。近來の耳を洗へり。絶唱絶唱と稱す。去來も自負して、蕉翁死後この句を得て、生前に耳を驚かさざること口惜しいひき」といふことが出てゐます。話の眞偽はとにかく、よほど面白い句であります。

一六 松の下露

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、

(一)後醍醐天皇。
卿相雲客

(二)忠臣。藤原藤房。
(三)藤原季房。藤房の弟。
十善の天子
田夫野人

(四)大阪府南河内郡金剛山の北麓。
心ばかりを盡くす

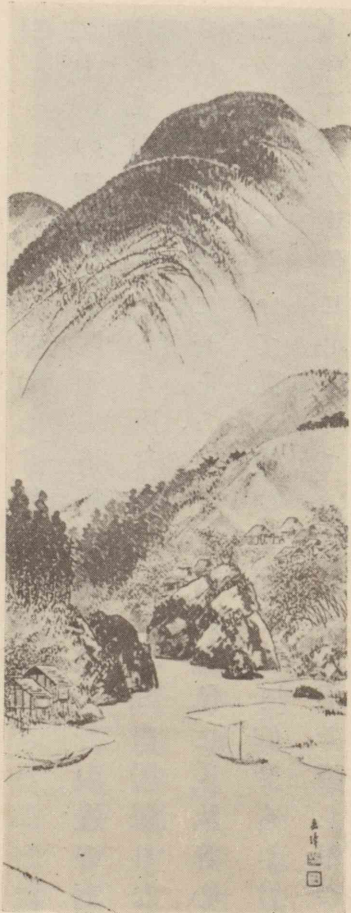
おろそか

主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、いづこを指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第にわかれわかれになりて、後にはたゞ藤房季房二人より外は、主上の御手を引きまゐらす人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そのことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡くされけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み二歩には立ちどまり、晝は道の傍なる青塚の蔭に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座のしとねとし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへずと

(一)奈良縣綴喜郡多賀村と井出村との中間。

かうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲



笠置山 (田南岳瑋筆)

れて、今
なはいか
なる目
に逢ふ
とも逃
れぬべ

き心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともに、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと聞き召して、木の蔭に立寄せ給ひたるに、下露のはらはらと御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、

(一) 京都府相樂郡山城大和の國境木津川の南岸にそびえる

さして行く笠置の山を出でしより
あめが下には隠れがもなし
藤房卿御涙をおさへて、
いかにせん頼むかげとて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

もだしけるこそうたてけれ
網代

山城の國の住人深須入道松井藏人二人この邊の案内者なりければ山々峰々のこる所なく搜しける間皇居隠れなく尋ね出され給ふ主上誠におそろしげなる御氣色にて汝等心あるものならば天恩を戴いて私の榮華を期せよと仰せられければさしもの深須入道俄に心變じてあはれこの君を隠し奉つて義兵を擧げばやと思ひけれどもあとに續ける松井が所存知り難かりける間事の漏易くして道の成難からんことをはかりてもだしけるこそうたてけれ俄のことにて網代の輿だになかりければ

(一) 奈良縣山邊郡朝和村

所從眷屬

(二) 北六波羅探題



笠置山行宮址

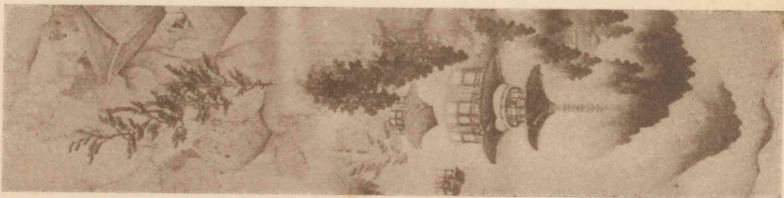
張輿の怪しげなるに扶け乗せまゐらせてまづ南都の内山へ入られ奉るその體たゞ殷湯夏臺に囚はれ越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならずこれを聞きこれを見る人毎に袖をぬらさずといふことなかりけり。この時ここかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人その所從眷屬どもに至るまでは計るに違あらず或は籠輿に召させられ或は傳馬に乗せられて白晝に京都へ入り給ひければその方ざまかと覺ゆる男女街に立並んで人目をも憚らず泣悲しむあさましかりし有様なり。十月二日六波羅の北方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警

(一) 足利高氏と大佛貞直

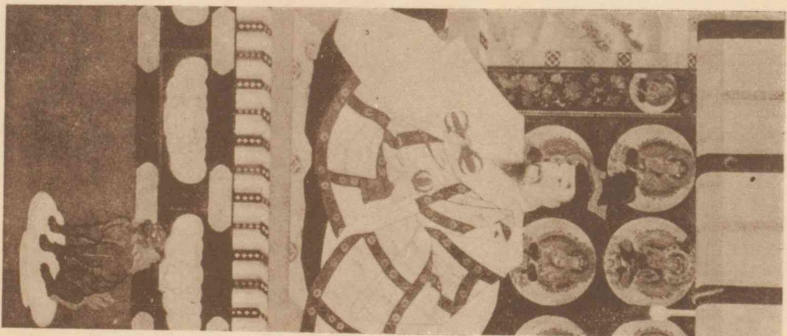
(二) 光嚴天皇

繼體の君

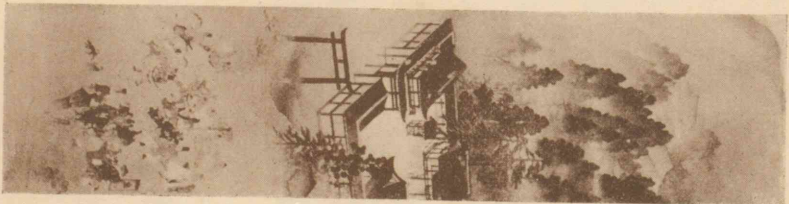
護仕つて主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將京へは入らずして、すぐに宇治へ参り向かひて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院新帝へ参らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄て置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ、神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも我が國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劔は武家の輩若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はんずる爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。」と仰せられけれ



伊藤龍涯筆



後醍醐天皇



ば、東使兩人も六波羅も、言葉なくして退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸にことかはりて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、きのふは紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の厳しきに御心を悩ませらる。時移り事去り、樂み盡きて悲み來る。天上の五袞、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺ゆる。

袞衣

月卿雲客

天上の五袞

(一) 「高き屋にのぼりて見れば頼たはち、民のかまどは今ぞ富みぬる」
(藤原時平の歌)

春は霞める高臺に
のぼりて見ればけぶり立つ
民のかまどのながめさへ、
消えてあとなき雲に入る。

(二) 壽永四年の境浦の戦

冬はしぐるゝ九重の
大宮内のともしびや
さむさは雪に凍る夜の、
龍のころもは色もなし。
むかしは遠き船いくさ、
人の血汐の流るとも、

今はむなしきわたつみの、高臺車もなき遊樂もなき
漫々としてきはみなし。
むかしはひろき關原、
つるぎに夢をあらそへど、
今も今も寂しき草のみぞ、
茫々としてはてもなき。
われ今秋の野にいでて、
興山高くのぼり行き、
都のかたを眺むれば、
あゝあゝ熱きなみだかな。

——藤村詩集——

(一) 小説家。明治二
十年長野縣に
生れた。破船牧
の兄弟。三浦製
生時代の主著と
糸工場の著者と
地と等々の著と
瑞紫

一八 御即位禮拜觀

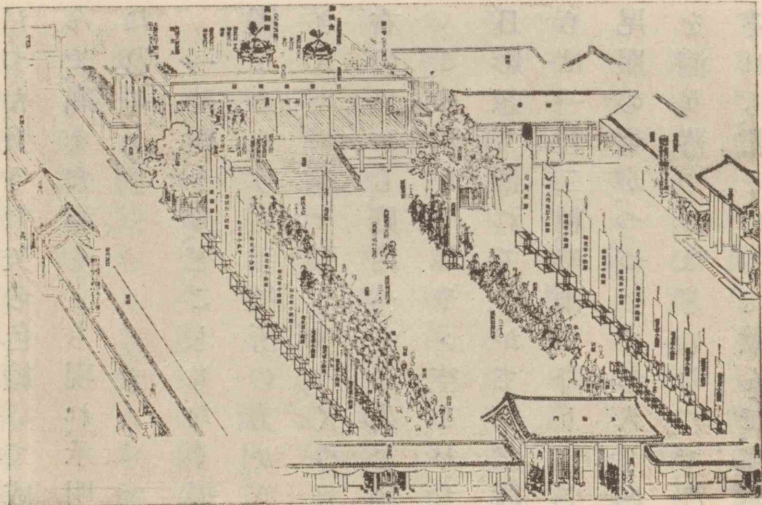
久米正雄^(一)

昭和三年十一月十日午後一時、我等は既に開け放たれて、瑞霧四方に溢る、建禮門前に進み、各、定め的位置についた。

空は、北に白く暈どれる時雨雲を僅かに残してゐるが、その上は飽くまで淺春の如く澄み晴れて、日影は塗色鮮かな承明門の黄の垂木と、丸柱の半ばをくつきりと照し、その彼方には、南庭の白河砂こそ見えないが、左の萬歳旛がやゝある風に翻つて、萬と閃めき、歳と輝いてゐる。

紫宸殿の屋根は、白く塗つた垂木の上庇が少ししか望めないが、帽額から以下は、鮮か過ぎるほど鮮かで、殊に日光が新修の南階一杯に照滿ちて、爽朗の感横溢。

瞳を凝らして、中央畏れ多くも高御座を、ぢつと窺ひまつれば



御即位禮拜觀圖說

朱塗の勾欄靜かに劃るところ、格子狭間の龍、仄かな金を點じて、御座は深く紫暗の御張に閉ざされて拜されるのみ。殿上を、式部官でもあるのだらう、瀟洒たる中世騎士にも似た姿が、ちらりちらりと通り過ぎて、何かと準備につくしてゐるさへ、繪のやうだ。やがて一時半近く、どこやらに人の氣配が起ると見れば、ちやうど眞先に衛門の諸士が入り來つて、各、本位につくところ

だつた。負うた矢の色、續いて威儀の人々、黒、緋、縹、各の袍に身を包んで、肅また肅と立ち現れ、承明門前を通過した。愈、御儀は近づいたのだ。

一時四十分、どこともなく振鈴が鳴つた。参列の諸員、参進の合圖であらう。右手控所の方から、先づ大禮服、陸海軍の禮装、嚴めしき人々が、胸を張り、ゆつくりゆつくり砂利を踏んで、承明門の左右の口から、庭内へと参入し始める。暫くは金装の連りである。

この頃から、風や、空をわたること急に、雲は見る見る擴がり、日影忽ち薄れて、やがて第二段の参列者たちが入り來つた頃からは、一粒二粒、時雨が降り出した。それも代議士たちと覺しく、燕尾服の姿が、つづいて参入し始めた頃からは、我等のシルクハット(silk-hat)を滴り落つるほどになつて、ひそかに天の無情を歎じられたが、それも、暫くにして歇んで、寧ろ誠の淨めの雨、天こそ實に心あつ

儀仗

て、さつと一と降り下し、祓はれたのであらう。

雨はやみ、再び日は照りわたると、やがて二時。突然、今度は「氣を付け」の令が門外儀仗の兵列に響いた。と、殿上を右手より、大禮服更に燦たる高位の人々が、時々袴の夫人を交へて靜かに左方へ通り過ぎ、北側の殿上へ居並び始めた。夫人の袴はいづれも緋色であるけれど、袴は萌葱、緋、紫、また緋の上に黒といふ如く、模様も各、變つて、色とりどりに美しい。そしてその中に、どなたかは知らぬが、薄、とき、色に白い毛襟をつけた洋装の方が交つてゐるのが、一際目立つて見えた。それが終ると、今度は外國の使臣が、式部官に導かれて、左手より現れた。禮装しるき夫人を伴うて各、本位につき、参入の列はちよつと途絶えた。

と、やがて間を置いた黒袍、嚴たる一偉軀の人が、同じく左手よ

(一)時の内閣總理大臣田中義一

り、佩いたる太刀にそりを打たせて、威儀堂々として入り來つた。首相とは、遠目ながらそれと知られる。續くは宮内大臣以下であらう。いづれも、さすがに從容としてゐる。

以上の諸員、悉く本位について、殿上、殿下、しばし肅たる人影に満ちると、やがて何かたゞならぬ靜謐が、天地を領した。門外の我等には聞えぬが、警蹕のかゝつてゐる氣勢が、人々の姿態によつて、遠き私にも感じられる。と、密かに仰ぎまつる御座の上、仄かに御帳の揺らぐは……。

つと、南階の上、北端欄干の際に、立ちたる式部官の右手が横ざまに動いて一振。合圖よしと見るや、庭上の鉦と鼓は相應じて、鳴り響いた。

最敬禮！……終つて、畏れながら更に瞳を凝らしまつれば、今まで、紫濃しとのみ見奉りし奥、仄かに樺色とも申すべき御氣配

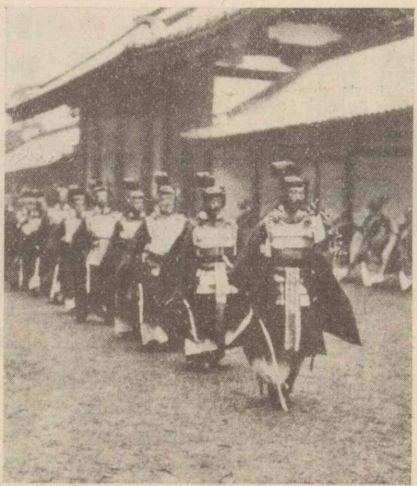
靜謐
警蹕

あるは、あれこそ黄櫨染なる御裾か、御袍の袖か。

折から陽光は、帽額直下黄簾の上まで、すべてを輝かに照燦かして、奥の神色、益、幽かに、我等は仰ぎてたゞ、凡々ならぬ氣配

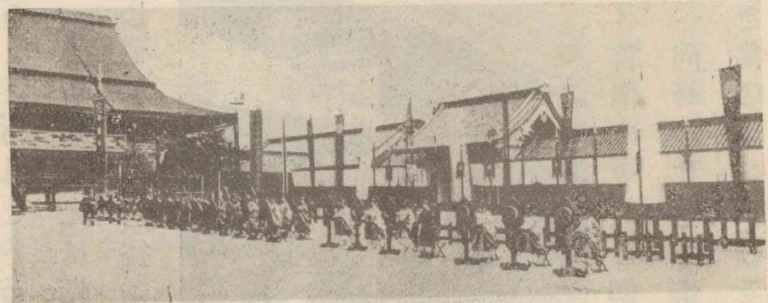
在すと在さぬとでは、正しくはつきり異ふ氣配を、眼底深く感じ得たのみである。

しかも、御帳臺の方は、我には太しき柱に遮られて、めでたかるべき國母の御姿、氣配だにをろがみ申す術なきを。



威儀の本位につく人々

首相はやがて御前を退りて、しづしづと殿縁を過り、西階の方へ向かつた。愈、御儀は始つたのだ。そして暫くすると、今度は庭上を、萬歳旛のかげを通つて、黒袍益、嚴に、太刀影、愈、燦と南階下に現



紫宸殿儀の上庭の儀にも響いた。御勅語だ！さるにても我等が
 突如、朗かなる御高き聲は、御簾を隔つる
 とも思はず、二つの門を透つて、我等が賤耳
 く聲を含みて待ち奉る。
 分、一分……殿上、殿下、門内、門外ともに全
 れた。やがて階下の中央に進み寄ると、上身
 をや、前方に曲げ、肩を伏せて畏まる。

れた。

やがて首相は靜かに迫らず南階の西隅を、階一階、一階毎に兩
 足を揃へて、塗沓の影黒く登る。さては壽詞の奏上だ。今、首相は更
 に高御座の前に謹立、恭しく拜し奉つて、左に身を向けながら、懷
 の壽詞を取出した。そしてはらはらと開くのが、折から眞直にさ
 し入る日影で、鮮かに見えた。

錚々

身を正しうして、首相はやをら捧讀し始めた。鏗を含んだその
 聲は滿庭を壓して錚々、遠き我等にさへはつきり響いてくる。
 捧讀し終つた首相は、壽詞をまた左手横に身をかしげて、恭し
 く捲く。捲いて、もう一度何故かはらりと開き、更にまた捲收めて
 退る。時に、密かに我が腕時計を見れば、三時に迫る、あと一二分。
 首相は恭しく長拜、靜々と階をおりるべく、身を轉じて歩んだ。
 そして、その一步まづ、南階の最上段にかゝつたと思つた時、奉祝

に焦れる御所外の民草は、赤心遂に堪兼ねたるか、遙かに一發の禮砲轟くと同時に、御所の彼方を取巻くと覺しき萬民の聲、とゞろに湧き起つた萬歳！また萬歳！汽笛鐘聲續き響いて、殿また轟……

首相は、その中を動ぜず從容と南階十八を下つて、また正面御前に進み出た。そして定位置につくと見るや、天にも響けと呼び奉る。天皇陛下萬歳。

その聲、正に蒼穹に響くの概あつて、殿上、庭上、門内の萬臣、門外の我等に至るまで、悉く共に聲を併せて唱和し得た。

萬歳！萬歳！萬歳！と三度。

天日燦として、中天にその唱和を反響し、風靜かにして萬歳靡さへ今は動かさず、ちつとその歡呼に傾聽するかのやう。

遠く、近く、いまだ鳴り止まぬ汽笛鐘聲々。笏は笏を京洛の山々

に呼んで、我等はたゞこの唱和の渦卷の中心に、何か感極まつて、目頭の熱くなるのを覺えた。

首相は、萬歳三唱の後、またおもむろに座に復した。

つゞいて忽ち起る「捧げ銃」の令！建禮門外、左右に各控へたる陸海軍軍樂隊は、この時とタクトを揃へて、唳朗たる「君が代」を奏し出した。節の終りを打つ鼓も、今日は心なしか、常よりも高らかにとゞろと鳴る。

諸員最敬禮。

軍樂隊の奏樂、餘韻を残して終ると、今度は更に唳朗のみの「君が代」高く單音を、四周に吹きわたらして、長く曳く。

頭を上げれば、既に昇御濟みし高御座は、紫雲深く閉されて、ここに御儀は、誠に大きく朗かに、終りを告げたのを知つた。誠に大きくも且つ朗かに。

唳朗
(Tact)

朝露のひるまは
さしもなかりし
空

一九 禁庭の野分 (昭憲皇太后御作)

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕星ゆづつの光も見えず。とかくするほどに雨いたく降出でて、ほとり近く語り



昭憲皇太后

合ふ人の聲だに聞きわかぬまでに
なりぬ。閨に入る頃は、なほ雨の音の
み聞えしを、夜深くなるまゝに、いか
皇みづちさへ鳴りはたゞきて、夢うつゝ、
とも思ひ定むるひまなく、稻妻のき
らめきわたる、いとけうとし。曉方に
は雨はをやみぬれど、風烈しう吹出

でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとど目もあはず。

上には民の爲とて、畏くも遠きさかひに出でましたるほどな

(一) 明治十四年明治
天皇東北御巡幸

けうとし

鳴りはたゞく

(一) 英照皇太后

ものむづかし

千町田

しなどの神

吹かなん

れば、いかなる行宮にましまして、この風の音に御心を悩まし給
ふらん。皇太后(一)の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも驚
きやし給ふらんと思ひつゞくるほどに、夜もあけぬれど、未だ風
静まらずで、いづこもおろしこめたる、いともものむづかし。

軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御
階のもとのばせをも、筒井の傍なる柳も皆折れふしぬ。今をさか
りと見えし眞萩も、名残なく散亂れたる、いと寂しく見ゆ。宮のう
ちだにかく荒れぬるを、まして怪しげなる賤が家居などは、倒れ
ぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべて實の
りよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつらんやなど
心にかゝりて、

國のためしなどの神も心して

いなはの上はよきて吹かなん

おちるる

なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさしいでぬるに、自ら人の心もおちるにけり。

二〇 婦人と文學的教養

本間久雄

(一) 評論家。英文學者。明治十九年米澤市に生まれ、米澤市に生れた。著者は婦人と文學史の著者。米澤市に生れた。著者は婦人と文學史の著者。米澤市に生れた。著者は婦人と文學史の著者。

文學、藝術に對する教養の程度は、直ちにその人の人間としての價値を示すものです。言葉を換へていへばその人がいかほど文學、藝術を愛好し理解してゐるかといふことによつて、その人がいかほど高尚な人であり、いかほど人間としての味はひの豊かな生活を送つてゐる人であるかが解るのです。實際の事實について見ても、文學、藝術の愛好者には、どことなく品があります。どことなく人間として精練されたところがあります。手觸りが柔かだどことなく深みがあります。といふのは文學、藝術を理解し味はつてゐるからです。これに比べるとどんなに立派な着物

を着てゐようがどんなに富をもつてゐようが、文學、藝術の理解をもたない人はどこか下品です。すべてが物質的で、手觸りが堅く、人間としての情味を缺いてゐます。つまり一種蠻的な感じを人に與へます。西洋でも、心ある人は最近頻りに高雅な教養といふことが、人間にとつて最も大切な條件であると説いてゐます。高雅な教養とは、上品で、風雅で、人生に對する理解があり同情があるといふことです。これは確かに人間にとつて最も大切な條件であるに違ひありません。この意味から文學、藝術に對するその人の理解と愛好とは、直ちにその人の人格を象徴してゐるといふべきです。そしてこれは婦人の場合に於ても無論眞理であり、同時に文學、藝術の理解と愛好とは、婦人の教養に於て一層重大なものとなる譯です。

右の事實は、單に一個人の場合に於てばかりでなく、一國の場

文運

合に於ても同じです。つまり、文學藝術の如何によつて、その國のその時代の文化、または文運の如何なるものであるかを、容易に知ることが出来るのです。この意味で、文學藝術は一國文運の華であると同時に、その國の文明を批判する唯一の標準であるといふべきです。これは古今東西の歴史のよく證明するところであることは、いふまでもありません。

或一つの國で、文學藝術の盛んな時代は、その國の文運の最も盛んな時代です。そして婦人が文學藝術の旺盛に與つて力のあつた場合には、婦人が思想的にも感情的にも社會的にも十分に認められてゐる時代です。これもまた古今東西の歴史のよく證明するところですが、

試みに例を我が國に取りますと、かの平安朝時代の如きがそれです。即ちこの時代は、婦人も男子と同じく、思想的にも感情的

J. Bradbury.

にも乃至社會的にも人間としての權利を主張し得た時代です。紫式部清少納言、和泉式部等の閨秀作家が輩出したこの時代は、單に我が國に於てばかりでなく、婦人運動の立場から見れば、世界の歴史に於て屈指の黄金時代だったので、文明と婦人氣質といふ書物を著してゐるブラッドベリーといふ人は、平安朝時代を以て婦人運動の立場から、黄金時代であると解釋してゐる一人です。實際この平安朝時代は、婦人の位置が非常に高かつた時代です。婦人が非常に尊重された時代です。またこの時代は、今日世界の問題になつてゐる、婦人の經濟的獨立といふことも、立派に實現されてゐた時代です。思想的にも物質的にも、男女が一切同權だつた時代です。それが武家政治になつて、武力が最上のものと崇められてから、婦人はいつの間にか男子に隸屬するものとなり、その結果、思想的にも物質的にも、婦人の位置が男子に

比して非常に低級なものとなつたのです。
 私は、婦人運動の立場から、思想的にも物質的にも、男女が同権
 だつた平安朝時代を憧憬すると同時に、その時代の婦人が文學、
 藝術を愛好し理解したことを考へて、文化と婦人の文藝愛好と
 の間には、切つても切れぬ關係のあることを今更のやうに感じ
 ないではゐられません。

— 現代の婦人問題 —

二 狂歌

(一) 綱屋貞柳

ふじの山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらすくたびれもせず

(二) 四方赤良

さわらびが握拳を振上げて

(一) 本阪の人。本名
 榎並善八。油煙名
 齋と號した。三
 保二十年(二)享
 九五年)歿。

(二) 江戸幕臣。本名
 大田覃。南畝ま
 た。蜀山人と號し
 四十八(文政六年)二
 年七十五)歿。

山の横つらはる風ぞ吹く

ほととぎすなきつるあとに

あきれたる

後徳大寺の有明のかほ

(一) 宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ

天地の動き出しては

たまるものかは

(二) 大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ

歌なかま経よむもあり

歌よむもあり

(三) 未樂管江



四方赤良筆

(一) 江戸の人。本名
 石川雅望。天保
 元年(二)八〇
 年歿。年七十八。

ほととぎす
 鳴つるかけ
 は見えぬと
 もきいた證
 據は有明の
 月

蜀山人

(二) 江戸の人。本名
 久須美孫兵衛。
 文化七年(二)四
 十七)歿。年七
 十七。

(三) 江戸幕臣。本名
 山崎景貫。寛政
 三〇二年(二)六
 年歿。年六十六。

(一) 江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號した。文政十二年(二四八九年)歿。年七十九。

(二) 江戸の人。田安家の士。本名小島源之助。享和二年(二四六二年)歿。年六十。

(三) 江戸の儒者。本名立松東蒙。寛政元年(二四九四年)歿。年四十四。

(四) 京都清水寺。

(五) 江戸の人。本名岸宇右衛門。寛政八年(二四九六年)歿。年七十五。

天の原月すむ秋をま二つに

ふりわけ見ればちやうど仲磨

鹿津部真顔

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ

唐衣橋洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水のはな

つむり光

ほとゝぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

水端

世の中をなんのへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

首修文

笑

戸川秋骨

人間は笑ふ動物だとか聞いてゐた。なるほど人間以外笑つたといふ動物のことは見たことは勿論聞いたこともない。もつとも笑以外の感情でも、人間以外他の動物は完全に表しはしない。動物が悲しんだといふことも、笑つたといふのと同様見聞きしたことはない。

或紀行文に、隊商の駱駝が悲しんでゐる様子の書いてあつたのを讀んだことはあつたが、いかなる感情の表白でも、動物

隊商 主にアラビヤの沙漠などを隊をなして歩く商人。面白くあらはし。

(二) 評論家。英文學者。慶應大學教授。名は明三。明治三年熊本縣に生まれた。著は英文學の講義。そのまの記等。その外翻譯が多い。

(一) 江戸の狂歌師。

笑(自修文)

(1) "Arabian Nights,"
有名なアラビヤ
のおとぎばなし
集の名

が示し得た例は甚だ稀であらう。但しアラビヤナイトなどを讀んで見ると、人間が動物にその姿をかへられて悲しんでゐるといふやうな話は、よく出遇ふところであるが、なるほどさういはれると、そんな場合でも悲みの方はあるが、喜を表白して笑つたなどいふのは、餘り多くはない。いかにも牛にでも馬にでもげらげら笑はれたら、をかしいよりも、氣味が悪くなる。考へてもそんなのはよい圖ではない。さうして見ると、笑ふのは人間ばかりかなと考へざるを得ない。自然にも笑ふ方は少いといへようか。無論、自然は無心で、その感情といつては、見る人の心から、その心を「自然」に擬したに過ぎないのであるが、波浪が怒るとか、山岳が昂然として控へてゐるとか、いつた類の形容は、随分よく見受ける。たゞ流が笑つてゐるなどは、たまに聞くところである。また花笑ひ鳥歌ふともいふから、自

昂然
元氣のさかんな
さま

哄笑
聲高くわらふこ
と。たかわらひ。

然の笑といふことも、可なりあるやうにも思はれる。たゞその笑は微笑にとゞまつて、笑の一部分に過ぎぬのは、是非もないことである。
ところが、人間にはいろいろな笑がある。哄笑、放笑、失笑、冷笑、苦笑、微笑、近頃ではそれをも事足りないと思えて、微苦笑なんて、老人にはとてもわかりさうもない笑方まで出來て來た。これは人間の進むにつれて笑の變化し、また複雑になる證據であらう。そして、人の感情の變化は、一番よく笑に顯れるのであらうとも思はれる。
漢字漢語では右の通りであるが、日本の假名でゆくと、またいろいろな笑方がある。にこにこ笑ふ。にやにや笑ふ。くすくす笑ふ。げたげた笑ふ。げらげら笑ふのはお化であるが、うらめしや」といつて出る幽靈などより、かう笑つてゐる化物は甚だ

(一) 書名は東海道二年に初版を出した。藤栗毛は江戸の北九人の著者。田舎の道中を歩く。海道の道中を歩く。狂言の事。能狂言の事。足利時代に能と劇の一種。

(二) Dickens. イギリスの小説家。西暦一八七〇年。

(三) "Pickwick" 書名。劈頭はじめ。

た。藤栗毛はをかしいにはをかしいが、それこそ私たちには顔をそむけずにはゐられないやうな笑をもつて得意としてゐる。狂言の中には、随分微笑をさせるものもあれば、哄笑をさそふものもある。武士道の天下にも、なほこんなもののあるのは有難いが、今日では、この武士道の笑を噛みつぶした習慣からと、今一つには、今日の切迫した生活からとで、笑が殆どなくなつてゐるのは情ない次第で、笑事ではない。

ディッケンスのヒクキツクには、その劈頭に、風に帽子を吹飛ばされた時の心持が、面白く書いてある。その一節は、殊に笑なくしては讀むことは出来ないが、事實風に帽子を取られた時の人の態度は、をかしたものである。あれくらゐ眞劍と滑稽とを併せて顯した圖はあるまい。否、眞劍だから滑稽をなすのはあるが、その時の人の笑顔を示してゐる。然し、心持は決して



拈華微笑



谷口香嶺筆

心理
心のありさま。

笑つてはゐない。買ひたての帽子を汚された怨や、他から見られた體面と自分の努力といったやうな、いろいろなのが混じ合つて、當人の心には、甚だ複雑な感が互に衝突してゐるのであらうが、その結果は、自分を嘲るやうな妙な苦笑のやうな笑となつて、それが顯れるのであらう。

急いで馳せつけた電車に乗損ねた時も、大抵の人は笑つてゐる。實は笑つて居り得べき時ではない。惜しいことをした、口惜しいといふ感じのあるべきところだが、あれも人から見られて體裁が悪いといふ爲からか、やはり一種苦笑のやうな笑をするのだらう。事は簡單だが、あれなどもなかなか複雑な心理から出た笑である。

とはいふものの、大抵の人は大事な際には決して笑ひはしない。大事に際して笑つてゐるのは、あはうか豪傑ばかりだ。即

對角的反對
全くの反對

(一)平景影。惡七兵衛といふ。

謠曲
うたひ。

忘形見

父の死んだ後に
生まれた子で、
こゝでは景清が家
を出てから生まれ
見た子で、ままだ
見れたことのない
もの。

ち大事に際して濟まして笑つたやうな心持であるのは、いや、所謂拈華微笑の心を持してゐるのは、あはうとは對角的反對をなしてゐるえらい人だ。それとは異なつてゐるが、私は作話のうち、この笑の忘れられない面白さをもつた一つの例として、景清の笑を挙げたいと思ふ。

私のいふ景清とは謠曲にあるそれであるが、その景清は必ずしも笑つてゐるのではないが、心持はいさゝか笑つてゐる。盲乞食となつた景清は、日向の國に忍んでゐた。そこへその忘形見である娘が尋ねてくる。景清は心強くも、所謂武士道の心といふのであらう。景清などいふ男は知らないといつて、その娘を逐ひかへすのであるが、里人の口から事實が漏れて、それが娘の探す父なる景清であることがわかり、止むなく親子の對面をなし、わざわざ乞食なる自分を遠く關東から尋ねて來

(一)美尾屋國俊。
源氏方の武士。

しころ(鏡)

兜の鉢から左右
と後方とに垂れ
て首をおほふも
の。

覇氣
意氣こみ。

昔日の笑
屋島で戦つた時
の笑。

た心根を察して、その昔平家一方の旗頭として屋島に戦ひ、敵將美尾屋と渡り合つたそのいはゆるしころ引の一段を物語つて聞かすのである。時世非にして、今は盲乞食となつた老景清も、昔を想ひ浮かべて、なほ残る一片不屈の覇氣を見せるところ、まことに笑ひどころではない、寧ろ落涙を催させるほどに緊張したものであるが、そのつかんだしころの切れた一段を語つて、美尾屋が「汝の腕の強さの恐しさよ。」といへば、景清は「美尾屋が頸の骨こそ強けれ。」と笑つて、左右へ退いたといふその笑こそ、極めて複雑な笑で、實はそれはその時の笑でなく、昔日の笑であるが、その氣分に至つては、この物語をしてゐる老衰な景清にまだ残つてゐるので、その笑の氣分心持が、頗る複雑なものとなるのである。私には景清の一曲、殊にこの昔の笑の氣分が、たまらなくよくて、忘れられないのである。

方を振向いて言つた。

「このやうな覺悟が、なぜ六尺の男にないので御座らう。それさへあれば、この亂れた世の中を治めるのに、一年の暇もかゝり申すまい。」

と慨然とした。

「いや、さほどにお歎きなされますな。そのお心はやがて天に通じないで何といたしませう。」

尼は筆を置いて慰め顔にいつた。上品な中に男まさりらしい凜凜しさが眉の間にほの見えた。

「お清どの、その色紙を。」

と、少女から先刻の紙と筆を受取ると、前の歌に續けてさらさらと認めた。

だが身にもありとは知らで惑ふめり

凜々しさ

水莖のあと

神のかたみのやまとだましひ

水莖の跡は舞ふやうに美しかった。

尼の名は野村望東といつた。

(一)光格天皇の御代。
(二)四六六年

彼女は筑前福岡の藩士浦野重兵衛の三女で、文化三年九月六



野村望東尼

日に、城下の厩後といふ所で生まれた。生來才色兼備で、茶の湯、琴、花縫針を始

望東(一)として女の道には何一つ暗いことは

東(二)なかつたが、取分けて和歌は國學者の

大隈言道(三)に學んで、すぐれて堪能であ

つた。處女の鑑として、一藩の若侍たちの懇望の的であつたが、二十四歳の年に、同藩の野村新三郎貞貫の人物を見込んで、自ら父に乞うてその妻になつた。天保三年京都では、勤王の志士頼山陽が血をはいて死んだ年であつた。新三郎貞貫も勤王の志の厚い

(二)江戸末期の歌人。
明治元年歿、年七十一

(三)仁孝天皇の御代。
(二)四九二年

「清子どの、御身も大和魂をお持ちか。」

と、戯れるやうに尋ねた。と、清子は、やゝ暫く晋作を見詰めてゐたが、すぐに前の「我もまた」の歌を書いたのであつた。

裏山から静かな鳥の聲が聞えた。

晋作は、ぢつと二首の歌を見詰めた。潤んだ目からやがて熱い一雫がほろりと落ちた。

「お恥かしう存ずる。」

と頭を垂れた。

僅か十四歳の少女や、六十歳に近い老尼の心にも、かうした強い雄々しい覺悟があるのに、如何に敵に追はれたとはいへ、大の男が、めをめと隠まはれ忍んで、安閑とした日を送るのは餘りに腑甲斐がないと思はれた。

彼は「死なう。」と決心した。そして、急に襟を搔合はせて、尼の前に

両手をついた。

「お暇仕る。」

「え。」

「これまでの御芳志、改めてお禮申し上げます。」

「して、ここを出ていづれへお越なされますぞ。」

「本國長州へ。」

晋作はきつと言つた。そして、今の心持を述べて、國へ歸つて同志を集め、斃れるまで俗論黨と戦ふつもりだと答へた。

「もし幸に勝つことが出来申したら、それは御兩所の御志の賜と存じ申す。」

「では、立てつらねた劔の中へ。」

望東尼は、ぢつと晋作を見詰めた。そして、動かし難い彼の決心を見て取つた。

「勇ましい御覺悟。斷じて行へば鬼神も道を避けるとやら。御勝利は疑ありませんまい。」

「では、我儘を見遁して下さりまするか。」

「なんの。」

尼は強く頭を横に振ると、手箱から一葉の短冊を取出して、新しい筆に墨をふくませた。

惜しからぬ命長かれ櫻花

雲居に咲かん春ぞ待つべき

「お餞別で御座りまする。」

「重々の御志、その櫻花と散るまでも胸にかけて參るで御座らう。」

晋作は短冊を押載いて深く内懷に仕舞つた。

二四 野村望東尼 その二

そのうちに清子は心得て、草鞋や笠を取出し、旅支度を整へた。

「おさらばで御座りまする。」

「お國の爲に命を惜しんで下さりませ。」

二人は垣根の所まで見送つた。と、その坂道の下から、一人の娘が息せきと驅上つてくるのが見えた。

「尼様、一大事で御座ります。」

その娘は遠くからかう叫んだ。それは月形洗藏の妹の梅子であつた。

「お、お梅様。一大事とは何事で御座りまする。」

望東尼ははつとして尋ねた。

「捕人が參ります。」

「え。」

「高杉様の討手ぢや。」

「や。」

三人はきつとなつた。

反對派の俗論黨では、その後、高杉の行方を一心に搜索してゐたが、漸く筑前領へ逃込んだことだけを突止めて、福岡藩へ捕縛方をたのんできた。その頃すつかり幕府方になつてゐた福岡藩では、早速八方へ忍びの者を出して、やうやう望東尼の庵に隠れてゐる武士がそれであることを突止めた。そして、すぐに大勢の捕人を差向けようとした。すると、何くれとなく高杉の身の上を案じてゐる月形が、どうしてか運よくそれを聞き出した。すはこそ。と思つたが、彼もやはり今はお尋ね者同様な身であるので、妹の梅子にそのことを言つて、急いで注進させたのであつた。

注進

「それはようお告げ下さりました。さもなくば毒蛇の口へお立たせするところでありました。」

望東尼は両手を合はせて梅子を拜んだ。そして、晋作を招いて何か囁くと、奥の一間へ連れて行つた。

「暫く御辛抱なされませ。」

彼女はさう言つて、佛壇の下の引出から、いつの間に用意して置いたのか、穢い破れた百姓の野良着を取出して、手早く晋作に着せた。そして、臺所から鍋墨を取つて来て、構はずにその頬に塗りつけた。見る見る内に穢いなり百姓が一人出来上つた。大きな侍鬘を崩して、手拭で頬被をさせると、清子や梅子にまでも、それが晋作だとは思はれぬやうになつた。

「さ、これで宜しう御座ります。」

尼は大小の代りに自分が祕藏の懐劔を贈つた。表へ出ると、ちや

うど近所の植木屋の娘の子の四つばかりになるのが、一人で遊びに来てゐた。お、なほよい。」と、尼はそれを見ると手を拍つて喜んだ。よい子ぢや。お前町のお祭を見たらうはないかえ。」と抱上げた。無心の子は両手を舉げて、「お祭、お祭。」と叫んだ。

「さ、この子を貰うて。」

尼は晋作にさう言つた。晋作は黙つてその子を貰うて外に出た。あとから梅子が白手拭を被つて、晋作の着物の包を持つて續いた。誰が見ても、ここらあたりの百姓が、子供や妹を連れて城下へ出て行く姿としか見られなかつた。

二三町行くと、果して三四十人の捕人に出逢つた。晋作と梅子は道の傍にしやがんで、お辭儀をするやうな風をして捕人をやり過ごした。誰一人怪む者はなかつた。虎口を逃れた二人は飛ぶやうにして福岡へ走つた。

虎口を遁れる

「御用だ。御用だつ。」

捕人はすぐに庵の八方を取巻いた。望東尼は平然として寫經を續けてゐた。清子も和歌の手習に餘念がなかつた。

「御用だつ。」

張合の抜けた捕人は一段と聲をはり上げて叫んだ。尼は靜かに顔を上げた。

「何御用で御座りまする。」

「黙れ。なみなみの用ではない。長州の浪人高杉晋作を隠まうた覺えがあらう。」

と十手を振りかぶつた。

「御座りませぬ。三間とないこの庵隈なくお探しなされませ。」
尼は眉一つ動かさなかつた。

「む、いふにや及ぶ。」

捕人はすぐに間毎に亂入して、押入は勿論、天井を破り疊をはね、床を穿つて見たが、既に逃れ出た晋作の姿のあらうはずはなかつた。

「む、さては早くも逃したないづれへやつた。言へ。」

捕人の頭はすらりと刃を抜いて、尼の目の前に差出した。

「存じませぬ。」

尼はじろりと白刃を見た。然し、顔色はやはり崩れなかつた。

「よし知つてゐようとて、一旦この身が隠まうたからは、骨が碎けて粉にならうとも行先はいへませぬ。」

と凜然と言ひはなつた。雪を凌ぐ老松のやうな雄々しさに、捕人は思はずたじろいだ。そして、そらした目に清子を見つけた。

「では、そちは知つてゐよう。」

氷のやうな刃は彼女の白い頬に觸れた。

「存じませぬ。」

「や。」

「尼様さへ知られぬこと、何のわたしが知つてゐませう。」

少女は鈴のやうな朗かな優しい聲で答へた。然し微塵も揺がぬ魂は、二十人の捕人の氣を吞んでしまつた。

「む、」と捕人どもは息をつめて口惜しがつた。然し、六十歳に近い老尼や十四歳の少女を相手に太刀も振れないので、羽拔鳥のやうにすこすごと城下へ歸つて行つた。

植木屋の娘の子はその日の中に綺麗な着物を着せられ、駕籠で送られて歸つてきた。

それから二日と経たぬ中に、高杉晋作等の奇兵隊は俗論黨を悉く討伐して、長州の天地には再び勤王の旗が翻るやうになつた。然し、尼の身の上には恐しい悲運が廻つてきた。

(一) 文政三年(二) 八月十日
(二) 賞美
(三) 基修
(四) 宣嘉
(五) 隆詩
(六) 通禪
(七) 季知
(八) 頼徳

慶應元年夏七月、平尾村の松林に鳴く蟬の聲を驚かして、一隊の兵士は蝗のやうに尼の庵を取圍んだ。それは晋作始め數多の志士たちに助力したからであつたが、差當つては、太宰府に流されてゐる三條公(一)その他の公卿たちに密かに拜謁したからであつた。三條(二)壬生澤(三)、四條(四)東久世(五)、三條西錦小路(六)の七人の公卿は、勤王攘夷を唱へた爲に幕府に嫌はれ、都に住み兼ねて長州へ落ち、そこで隠まはれてゐた。これが歴史に名高い七卿落である。然し、その長州も一時俗論黨の天下になつた爲、あはれにも頼む木蔭に雨の洩る心地で病死した錦小路卿、他國へ走つた澤卿の外の五人は、囚人として菅公の昔と同じ太宰府に流された。太宰府は福岡からは同じ國の内のこととて、さう遠くはなかつた勤王の志の厚い望東尼は、そのことを聞いて、庵に落着いてゐられなかつた。彼女は姿を變へて屢、太宰府へ行つて、密かに右

の公卿たちに拜謁してお慰め申し上げた。それが端なくも洩れ聞えたので、福岡藩の兵士に襲はれたのであつた。

望東尼はもう言譯をしなかつた。

浮雲のかゝるもよしや武夫の

大和心のかずに入りなば

とばかり口吟んで、從容として縛に就いた。

「わたしも一緒に」と、清子は泣いて尼に取繼つたが、ゆるされなかつた。尼の駕籠は揺られ揺られて海邊まで擔がれ、そこから小舟に乗せられて、立海灘の孤島姫島に棄てられた。同時に月形洗藏始め二十餘人の同志は無慚にも斬られてしまつた。

「お、天道誠を照らし給はぬか。尼は我が身のこととは忘れて、これ等の人々の死を悲しんだ。そして、指の血で供養の爲に經を書寫した。また

おくれゐて書くもかひなし法の文

よみがへり來んつてならなくに

と和歌を認めて密かにその遺族に贈つて慰めた。

島の秋が來た。

秋の夜の晴れたる空の月見ても

心にかゝる雲のうへかな

と詠じた。

はるのことはな
かき物はな
かりけり
しかのとし
しかれし
しとおもひ

望東尼

しはるのことはな
かき物はな
かりけり
しかのとし
しかれし
しとおもひ

野村望東尼筆

冬が來た。何の圍らしい圍もない孤島の牢屋には、風も、雪も、浪のしぶきも、洩るが儘に身を濡らして、肉も骨も凍り果てるかと思はれた。然し、尼は毫も節を屈しなかつた。雨につけて思ふのは、

たゞ大君のことばかりであつた。そして、その心のあとは和歌になり文になつて、やがて三卷の「姫島日記」になつた。

一年は夢のやうに過ぎた。やがてまた秋が島の朝夕に音づれた。そして、一夜激しい野分が草木を吹盡くすかのやうに吹きわたつた時突然小山のやうな浪間から一隻の小舟が現れて、矢を射るやうに島の渚へ漕寄せた。あはやと思ふ間に、黒装束の武士が四五人ばらばらと砂上へ飛上つた。

「おのれ曲者つ。」と、島守の番卒は手に手に棒を持って打つてかかつたがすぐにたゞき伏せられてしまつた。と忽ち二人は掛矢で牢屋の格子をはつしと打つた。細い格子は一打でばらばらに壊れた。

「それつ。」と曲者は一散に中へ飛込むと、驚く老尼を小脇に抱へて、元の小舟へと疾風のやうに走り出した。島の者が残らず篝火

(一)孝明天皇の御代。
(二)五二七年

を持つて集つた時分には、小舟の影はもう長州沖の方へ消えてしまつてゐた。
尼を奪つたのは、筑前の浪士藤四郎親茂とかの高杉晋作とその一味とであつた。晋作はまづ下關の邸に尼を入れて、母のやうに大事にかしづいてゐたが、そこは筑前に近いので、更に周防の三田尻に移して一層丁寧にもてなした。清子もやがて呼ばれて昔のやうに介抱する身となつた。
慶應三年になつて彼女は病を得た。毛利公は彼女の志を憐んで、屢藩醫を差遣はされて、懇ろに介抱させられたが、天命はどうすることも出来ず、同じ年の十一月十三日に、多くの志士たちに圍まれながら靜かに瞑目した。年六十二。明治二十四年の暮に正五位を贈られた。

花浦の松の葉白く置く霜と

消ゆるはあはれ一盛りかな

二五 尊い獻身の生涯

高須梅溪

(一)小説家、評論家。明治十三年大阪に生れた。著空の平家の人々等史論等の著がある。
(二)Perry。アメリカ合衆國の海軍少将。西暦一八五二年八月我が國に來た。西暦一八五八年四月(西暦一八五八年)浦島太郎の東岸、東京灣の入口。
(三)Russett。政治家、海軍軍人。西暦一八八三から一八八八年に來た。
(四)彦根城主。掃部頭。安政五年(二一八八年)大老となり、萬延元年(二一五〇年)櫻田門外で殺された。
(五)調印

江戸幕末の歴史を見て、いつも深く感動させられるのは、獻身の一生を送られた皇女和宮の御事蹟である。和宮の少女とならせられた時代は、我が國では多難を極めた秋であつた。米國水師提督ペリーが浦賀(一)にくる、續いてロシヤの使節プーチヤチン(二)が長崎にくるといふ有様で、彼等が世界の大陸を説いて通商互市を求めたに對して、我が國では開港を主張するものと、昔通り鎖國を唱へるものとがあつて、その間に烈しい争が起つた。時の總理大臣ともいふべき井伊直弼は開國説に決して、斷然アメリカとの通商條約に調印し、一方攘夷派を手強く抑へつけて、手當り

次第に獄舎へ投げこんだので、彼は櫻田の雪と共に消えて世を去った。

世はかうした有様であつたが、當時の朝廷が外交について抱かれてゐた意見と、幕府の考とは一致しなかつた。そこで、幕府において、直弼がその事を心配して、朝廷と幕府の間を圓滿にする爲に、内々和宮を將軍家茂夫人に迎へ奉りたいと朝廷に歎願してゐたのが、直弼の歿後になつて、始めて實現せられるやうになつた。

和宮は仁孝天皇の第八子で、弘化三年の御出生で、六歳の時、有栖川宮と婚約せられたのであつた。それで普通の順序からいへば、當然有栖川宮と御結婚なさるわけであつた。ところが内外多事の時代となつて、朝廷と幕府の間がらがとかく圓滿を缺くやうになると、朝廷の大臣等の中にも、それ等のことに心を痛めて、

(一) 紀伊齊順の子。將軍家定に養はれ、安政五年將軍職を継ぎ、慶應二年(二五二六年)二十一歳で薨じた。
(二) 第二百二十代。
(三) 二五〇六年。
(四) 熾仁親王。

諒解

朝幕一和の有様に立歸るやうにと願ふものがあつた。それは幕府の當局でも同様であつた。かうしたことから、和宮御降嫁のことは次第に話が進んで、たうとう有栖川宮との婚約を双方の諒解の下に取消すことにせられて、改めて和宮が十六歳の時、十四



和宮(池田輝方筆)

代將軍家茂の許に降嫁せられたのである。

當時の和宮の御胸の中はどうであつたらうか。私にはなんとなく無限の感慨に打たれるのである。宮は

家茂の許へ降嫁せられるまで、有栖川宮こそ未來の郎君であると思し召して、優しい心のうちにその事のみをひたすら忘れ給はなかつたであらう。それに優しい美しさに満ちてゐる西の京

の情味や風趣についても、宮には深い愛を感じてゐられたであらう。

さうした場合に思ひがけなくも、江戸へ下つて家茂に降嫁せねばならぬといふことを、突然廷臣から聞かれた時は、なんとなく失望と悲みの交錯した感じに沈まれたであらう。けれども宮は御聡明で、自分が朝廷の爲に江戸に赴くのであるといふことを自覺せられると、もう悲しんではゐられないとあきらめられた。

をしまじな君と民とのためならば

身は武藏野の露と消ゆとも

宮がよみ出でられたこの一首の歌を誦すると、その胸のうちで雄々しくも自分の運命について樂觀せられると共に、どんなに苦しくとも、悲しくとも、朝廷の爲天下の爲に良いことならば

詠

自分ひとりじつとそれを忍ぼうと決心せられた御様子がよくわかる。

その後、宮は未だ馴れ給はぬ長途の旅に上られて、事なく江戸に着かれた。そして家茂夫人となられた。宮と夫君家茂の間は、春風の吹くやうに美しく暖かつた。だが、前將軍夫人天璋院が、とか



筆御宮和

く宮に對して冷たい態度を以て臨んだことは、未だ世の中の荒い風に當られない宮に取つては、可なり苦痛であつたらうと思はれる。

それに當時の幕府は、財政の上に行惱んでゐて、宮が好まれた大御所風の生活も、思ふやうに實現せられる便宜がなかつたこ

(一) 家定(十三代)
(二) 名は敬子。明治十六年四十七歳で薨去。

管絃のこゝろを
梓のみ春をさへつるうくひすにしらへかよはす松かせのころ

とは、宮の御心に寂しいもの足りなさを印象したのであらう。一體に宮は、運命の上において幸福でなかつたのである。

家茂は心から宮を愛した。宮にはそれが何よりの心強さだつた。だが家茂もまた内外多事の時代であつたから、思ふやうに家庭の平和を樂しむ餘裕に乏しかつた。困難な問題が引續いて起つて、家茂の心を悩ましがちであつた。

家茂は徳川歴代の將軍のうちで、一番悲劇的な人であつた。平凡な歴史家は一概に家茂の人物が暗弱だつたといふが、未だ二十歳に達しないうちに將軍となつて、空前の多難な時に逢つたのだから、普通の暗君なら、とても一日だつてそれに堪へきれないであらう。

けれども家茂は、朝廷の間をも圓滑にして、外交問題にも見苦しい失策を取るまいと、いろいろに心を碎いた。彼は確かに純な

(一)二五二三年。

内助の功

(二)二五二六年。
(三)徳川幕府の一事、長州を征伐して、長州を

多感な、そして割合に賢い將軍であつたのだ。たゞ意志が少し弱かつただけである。

宮は家茂の性格やその周囲を見て、心から家茂に盡くさうとせられた。文久三年家茂が入洛する時には、和宮もまた共に西の京へ赴かれた。そして家茂が大阪城に入つた時には、宮も蔭ながら内助の功を立てられた。

だが宮に取つても、家茂に取つても、この上ない不幸が涌いた。それは慶應二年八月家茂が、その志した長州征伐が一段落をも告げないうちに病んだことである。新秋の風は冷たく家茂の病床に吹いた。そして彼の病は一日毎に重くなつて、たうとう八月二十日に薨じた。この時の宮の悲みはどんなに深かつたであらう。空に澄む月の色も、叢の中に鳴く蟲の聲も、皆哀愁を誘ひ出すよすがとなつたであらう。

寡婦

暖かい愛の下に互に平和を楽しまれた宮は、家茂を失つてから、急に寂しさが身にしみるやうに思はれた。世の中のあらゆる悲痛が宮の上に集つたやうに、盡きぬ涙に袖を濡された。その時宮は二十一歳であつた。宮は一生寡婦として暮さうと決心せられた。そしてその美しい黒髪を惜氣もなく切つて捨てられた。あ、かうして後に生残つてゐるよりは、いつそ夫君と一緒にあの世へ行つた方が、どのくらゐ幸福かも知れない。生の悲痛、生の寂寞、それはもう堪へられないと宮はうち惱まれた。

しがらみ

みつ瀬川世のしがらみのなかりせば
君もろともに渡らましものを

世の中の憂きてふ憂きを身一つに

とりあつめたる心地こそすれ

これ等の歌を讀むと、宮の痛ましい御有様が眼に見えるやうで

ある。この時分から宮は靜寛院と稱せられた。

その後時勢が幾たびも急變して、幕府の亡びる日が愈近づいた時、宮は飽くまでも、幕府と朝廷の關係を和げることについて御心を盡くすことを惜しまれなかつた。家茂薨去の後、幕府と宮の關係は以前のやうではない。京都では、宮が幕府を離れて歸られることを切に望んでゐたし、朝廷でも、宮の御身の上を非常に氣づかはれたのである。けれども宮は、一旦家茂夫人となられた以上、貞婦としての道を全うしてゆく爲に、やはり最初降嫁せられた時のやうに、朝幕の一和を計るのが自分の務だとせられた。そして十五代將軍慶喜の爲には特に力を添へられて、寛大の處置を執られるよう、親しく朝廷に歎願せられた。

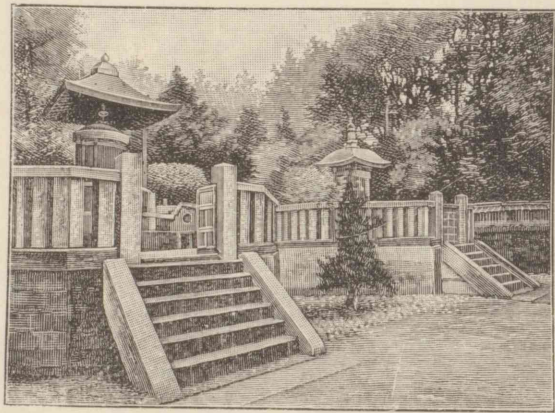
宮の心をこめられた歎願は、確かに朝廷を動かした。慶喜はそれを深く感謝した。そのうち王政維新の時代になると、宮は極め

て質素な生活をして、わびしい日を送られた。そして京都からたびたび御迎の使者が來たけれども、徳川家の前途をはつきり見届けるまでは、歸らうとせられなかつた。

宮の御決心の雄々しさ高潔さは、その侍女以下に與へられた布告書の中に、凜然として現れてゐるが、その中で、それ人たるものは、匹夫匹婦と雖も五倫の道正しく守るべきことは、衆の知るところに候。我苟も民の父母たる至尊の血脈に生まれ、天下の政務を天子より御委任あらせられ候武將の妻たる身にて、この五倫の道失ひ候はば、孝貞共に立ち難しと心得居り候へども、何分不肖の身、素志も衆人には顯し難く、慚愧に堪へず候。といつてゐられる。宮はこの決心で江戸に留つてゐられたが、龜之助が慶喜のあとを繼いで新しく駿河に封ぜられたことを聞いてはつと安堵せられた。

匹夫匹婦
五倫の道

(一)徳川家達。慶頼
の第二子。公爵。
貴族院議長。



その後明治二年に入洛せられて、父帝の御忌をも修められた後東京に歸られ、麻布に住んでゐられたが、明治十年病んで、三十二歳で薨ぜられたのである。

家茂及及び宮御廟
家茂の歿後、深い悲みにもうち勝つて、よく徳川家の前途を見届けたのは、立派な男子さへも及ばない雄々しい御心を示されたものである。私は宮の御一生が——殊に後半生が——寂しい色で包まれてゐることに限り、ない同情を捧げたいと思ふが、またさうした苦しい、寂しい運命に逢はれた宮が、平凡に幸福な生を送るところの

女性よりも遙かに尊い充實した生を送られたことに對して、深い敬仰の情を捧げたく思ふのである。

改新女子國文卷六終

昭和六年度臨時定價金 六拾五錢

浦野製

昭和四年九月二十五日發行
昭和五年三月二十九日訂正再版發行
昭和五年四月九日訂正再版發行

改新女子國文附

昭和五年臨時定價	自卷一至卷四	各金七拾五錢
	卷五、六	各金六拾七錢
昭和六年臨時定價	卷七、八	各金六拾五錢
	自卷一至卷四	各金四拾六錢
昭和七年臨時定價	卷五、六	各金四拾壹錢
	卷七、八	各金四拾錢

編者 芳賀矢一
 訂補者 橋本進吉
 發行者 東京市神田區通神保町九番地 富山房
 代表者 坂本嘉治馬
 印刷者 富山房印刷部

檢印



發行所

會社

富

山

房

東京市神田區通神保町九番地

電話九段一六三—一六二番
振替口座東京五〇一番

三丁 粟屋孝子

TAKAKO Hwaya

女子國文書

姓名	粟屋孝子
年次	三丁
性別	女子
籍貫	山梨
職業	無
備考	

山梨県立女子師範学校
昭和十一年三月

